

周恩來の誤算

——顧順章事件の真相（四）

松本英紀

目次

- 1 顧順章の叛変
- 1 つくられた事件―党史から見た顧順章事件
- 2 波紋 i―総書記の逮捕
- 3 波紋 ii―ノウレンス事件
- 4 波紋 iii―伍豪啓事事件
- 5 周恩來と顧順章
 - i 顧順章の登場
 - ii 李立三路線と顧順章
 - iii 顧順章の追放
- 2 顧順章事件の真相
 - 1 顧順章の逮捕
 - 2 董健吾「脱險記」（以上第六二二号）
 - 3 誰が顧順章の「叛変」を知らせたのか（以上本号）
 - 4 その後の顧順章、錢壯飛、董健吾

3 誰が顧順章の「叛変」を知らせたのか

i 錢壯飛神話の創出

一九六二年二月、中共特科の出身で人民解放軍の上將にまで上った李克農が北京で斃れた。葬儀を主祭した周恩來は悼詞の中でこう述べた。

「大革命の失敗後の厳しい白色テロのもとで強靱で勇敢に敵と闘争を進めた。革命のために犠牲になった錢壯飛、胡底同志とともに党中央の指導機關の安全を保障することに卓越した貢献をなした」^①

李克農が錢壯飛、胡底と党中央の指導機關の安全を守ったというのは、二九年の末、中央特委の周恩來が李克農を組長とする特別チームを作り、国民党の特務機關の中枢に潜入させて情報を蒐集し、党中央に多くの利益をもたらせたことをいった。周恩來は三人の功績を称えて「龍潭三傑（敵の心臓部にもぐりこんだ三人の英傑）」と呼んだ。

とりわけ、国民党特務の指導者徐恩曾に取り入って機要秘書になった錢壯飛は顧順章の逮捕、叛変の情報をいち早く探知して、機敏に党中央に伝え、党組織の壊滅の危機を救った。後年、錢壯飛のことに話題が及ぶと、周恩來はしばしば「もしも錢壯飛でなければ、われわれはみんな存在しなかっただろう」と深い哀惜の情をもって回顧した^②。この周恩來の言葉は錢壯飛に対する絶対的な認識となつて歴史真実になった。錢壯

飛は中国共産党の傑出した情報工作員、隠蔽戦線の英雄であったという神話を創出したのである。

党の文献を刊行する権威ある雑誌に掲載された周文琪の「敵の心臓で戦った銭壮飛同志」と譚宗級の「顧順章の叛変、投降と銭壮飛の中央を「保衛した功績」は最初に銭壮飛の事跡に関する党の正式の評価を示したものだ^③。このように党史の基準が示されると、その後、党史をさらに敷衍した多くの銭壮飛論が表れる。見るところでは、党史の基準にもとづいた正伝を書いた葉炳南の「銭壮飛」をはじめ、大陸で発行された銭壮飛に関する論考は十数篇にも及ぶ^④。全てに目をとおした訳ではないが、ほとんどの論考は真理を追究することによって新しい事実を提起したものでなく、党史に描かれたストーリーを正当化するものに他ならなかった。というより、彼らがこぞって銭壮飛の事跡の真相を隠蔽する役割を担ったとさえいえる。多様な議論が展開されることよって却って真相が隠されてしまうものである。しかし、いくつかの文章には銭壮飛の行動に新鮮な解釈を加えたものがある。あるいはそれは正史が叙述できなかった事実を表明しているのかも知れない。前出の葉炳南の「銭壮飛」は、党が定めた基準に従って諸説を整合して書かれた正伝であったが、その内容がすべて真実を述べたとは限らなかった。

その時の党の路線を正当化して語られる党史は事実を追究して真実が語られるのではなく、党の正当化に合わせて事実が作られる。したがって銭壮飛の事績は中共特科の周恩来の政策に合わせて書かれ、銭壮飛という現実の人物の足跡を記述するのではなく、党史はこの二つの「事実」を巧みに整合して書いたものだった。重要な事柄なのでふたたび後述することにするが、葉炳南が如何に事実を党史、つまり党の権威が作ったストーリーと整合したかを物語るこんな記述がある。

四月二十四日の夜、顧順章が国民党の武漢行営偵緝処に逮捕された情

報が、二十五日の夜遅く、南京の特務本部に当直していた銭壮飛の元に届いた。銭壮飛は事の重要さに気づき、急ぎ上海の周恩来に伝えることにした。「ただちに娘婿の劉杞夫（秘密連絡員であった―原注）を上海に遣って李克農に報告させ、他方で手元の文書や電文を片付け、機を伺って『民智通訊社』に行つて配置していた同志に知らせようとした」。国民党の情報機関の責任者徐恩曾の機密秘書になって、中共の特科に多くの情報を流していた銭壮飛の諜報活動の中で、この件は誰が顧順章の逮捕を知らせたのかという本節の課題の核心になるところであるが、葉炳南は次のように述べる^⑤。

「一九三二年四月二十五日はちょうど土曜日であったので、銭壮飛一人だけが『大本営』に残つて当直していた。とつぜん武漢国民党特務機関からの徐恩曾を経て国民党中央秘書長陳立夫に宛てた六通の緊急極秘電報をたて続けに受け取つた。各電報の上にはすべて『徐恩曾親訊』の字が書かれていた。銭壮飛は電報に署名し、一方で、心中で忖度した。武漢ではいったいどんな重要なことが起こつたのか？ このような緊急に続けて電報を打つ必要があるのだろうか。このことは銭壮飛に高い警戒心を起こさせた。誰もいない弁公室で前に写真に撮つていた徐恩曾の密碼本で電報の内容を訳出した。彼をびっくりさせたのは、第一報の電報中にこのように書かれていたからだ。

黎明（これは銭壮飛がとくに知っていた顧順章の仮名であった―原注）が逮捕された、すでに自首している、迅速に南京に押送することができれば、三日以内に中共中央機関全部を破壊できる」

冷静で沈着な銭壮飛は仔細に電報の内容を書きとめ、ふたたびもと通りに電報を閉じたあと、すぐに決断を下し、まず娘婿の劉杞夫（またの名は劉正風といい、湖南出身、当時はわずか二十歳に満たない青年で、銭壮飛に『大本営』に配置され、行政政務工作に従事していた、暗中、上海の李克農と連

絡をとる秘密連絡に当たっていた(原注)を派遣することにし、夜行列車で上海に行つて、この緊急情報を李克農、陳賡を通して、急ぎ党中央に伝えることにした」

劉杞夫が発つたあと、錢壯飛はしばらく「大本營」に留まつて、引き続き動静を観察し、採るべき応變の処置を考えた。他方で、管理していた重要文電、帳簿を片付け、何時でも逃げる事ができる準備をした。

葉炳南はこの件を記述するとき、いくつかの論考を参考にしたはずであったが、しかし記述するに際し、党史の基準の枠を逸脱することはなかった。さきに見たように周文琪の党史は娘婿の劉杞夫が一人で上海に駆けつけたことになっている。葉炳南はこの個所に次のように注を付けた。「錢一平同志が提供した徐双英の生前の回想によれば、その日の晩、錢壯飛は劉杞夫といっしょに上海に帰つてきて党中央に報告したという。しかし他の資料によれば、錢壯飛は当時、まだ少しばかりのやらねばならない後始末のために留まつて、すぐに南京を離れなかった。本文の作者は後説がやや合理的と考え、故に徐説を用いなかつた」。

この注記の裏には多くの注目すべき事実があつた。先ず錢壯飛の複雑な家庭環境を見ておく必要がある。錢壯飛の家族は上海に住んでいた。ここに出てくる徐双英は錢壯飛の最初の妻で故郷の湖州で結婚した。一年後に娘の錢椒が生まれた。錢壯飛は北京医学専門学校を出ると同級生の張振華と一家を構える。張振華との間には二子一女がいた。長女の錢蓁蓁(映画スターの黎莉莉)、長子の錢江、そしてこの次子錢一平である。錢壯飛が徐恩曾の機要秘書となつて南京に赴任したとき、錢椒、劉杞夫と錢江を連れてきて徐恩曾に忠誠を示した。したがつて、上海には錢壯飛の母、范氏と正妻の徐双英、もう一人の妻の張振華と末子の錢一平が同居し、なお徐恩曾の妾も前房(おもや)に住んでいたという。

老太太徐双英との間に生まれた娘、錢椒は李克農に伝言した劉杞夫の

妻で、錢椒は夫と父はいっしょに上海に行つたと語っている。徐双英は、錢壯飛の死後も張振華の知り合いの家で晩年を過ごしたという。上海の錢壯飛家族の入り組んだ状況は、錢壯飛、李克農同一人物説なども係わつて重要なもののちに検討を加えるつもりであるが、要するに、葉炳南は事実を語つても何の支障もない徐双英の言葉を排して党の見解——周恩来が描くストーリーを採用したのであつた。

顧順章事件において錢壯飛の事跡ほど党の堅固な神話が創出され、その反面、これほど多くの逸話が語られた人物はいない。それが何を物語っているのかは本節の課題でもある。

ところで、党史に対して多くの異論を提出したのは、錢壯飛に党の機密情報を漏らされた国民党の情報責任者たちであつた。彼らの逸話は負け惜しみの釈明を述べたものというより、あんがい事の真相を表明していた。信用できる証言と言えるのである。

中央組織部調査科から武漢に派遣され、顧順章の逮捕を指揮した武漢行営偵緝処の蔡孟堅は二つの文章を残している。

- 一、「二つの書き改められる中国近代歴史の故事」(以下蔡論文一とする)
- 二、「共党は私を銀幕に搬上(映画化)して自ら悪跡を顕す」(以下蔡論文二とする)

これら二つの文章は、顧順章を味方に取り込んだ国民党の情報総本部の側から錢壯飛の行動を追跡しており、当然の如く共産党と相反する見解を述べている。とりわけ蔡論文二は、蔡孟堅がずっと後に書いた回想録で、錢壯飛の子、錢江が一九八五年に監督して撮つた当時の南京政界の裏面を暴露した映画「金陵の夜」を批評するものであつた。

ある三十年代の中国映画を紹介した一文のなかに錢江のプロフィールをこう紹介する。

錢江は北京生まれ。三十年に父に伴つて南京にやってきたが、父が上

海に逃亡したあと、何故か銭江は南京に取り残され、幼い甥と路頭をさまよった。のちに映画技師、映画監督、俳優になる。代表作は四十九年に撮った「中華女児」で、チェコで開かれた第五回国際映画祭に参加、自由闘争賞を受賞した。一九五四年、ソ連に留学、五十六年に帰国後、「祝福」を撮影、数々の国際賞を取った。七十四年から映画監督になる。

「金陵の夜」は銭江が子どもの頃に体験した南京を舞台にした映画であったが、蔡孟堅によれば、この映画は当時、統一戦線部部长の鄧穎超の検閲を受けたという。つまり鄧穎超のお墨付きの映画であった。鄧穎超は銭壯飛の正体について夫の周恩来と同様、多くの事実を知っていたに違いない。銭壯飛の死後、銭の子どもたちに「鄧ママ」と呼ばれた。たんなる親しみの呼称ではなく、周恩来夫婦が銭壯飛の遺族に関わらざるを得ない何か深い事情があったのではないか。

子どもを残して上海に逃避する銭壯飛の当時の様子を党史作家の秦言は銭江の回想を引いて次のように述べる。

「その時、空はまもなく明るくなるうとしていた。銭壯飛はいそいで汽車の時刻表を調べた。午前はまだ上海行きの汽車があり、銭壯飛は家の人に「事は遅くならないほうがよい、私はこの汽車で上海に行く、といった。尋ねる人がいれば、いまままでここにいたといいなさい。こうしてもすこしの時間をかせげるかも知れないが、しかしあなたたちはここにいと苦しみを受けるだろう。」

銭壯飛は眼に涙を浮かべた。銭の娘、椒椒は父も思わず知らず涙を落すのを見た。娘はだんだんしつかり者になってきて、鄭重にいった。「パパ、我われみんな党の子よ、党の安危は我われの責任だわ、あなたは安心して行ってください！」銭壯飛は気持ちをやさしくいった。「お前たちはちゃんと弟の面倒を見なさいよ。いま汽車の出発時間にはまだ早い。お前たちはさきに休みなさい。早朝はいつものように勤めに行き、

弟をいつものように学校に行かせて、決して敵を騒がせてはいけなよ」。銭壯飛は門を開けて去っていった。外はもうかすかな朝の光が射していた。

回想した銭江はこの時まだ四、五才のはずで学校には行っていない。銭江はこの後、姉夫婦が当局に捕らわれたので、南京の街を放浪することになった。銭壯飛は活動の足手まといになるので南京に残したのだという。銭江の回想はすべてとは言わないが銭壯飛を英雄にするために後に作られた美談に違いない。

ところで、もう一つの評論、すでに紹介したことのある周谷の「六十年前の国民党の心臓中に潜伏した共謀」は、中国国民党、中国共産党双方の各評論を整合したものであるが、いくつか鋭い指摘も提起している。国民党情報本部（大本營）に潜入した銭壯飛、楊登瀛、胡北風（胡底）、李克農は、軍人出身の李克農を除いて、結局、周恩来に利用されたのだという指摘は、本節の課題のひとつである李克農と銭壯飛の関係を考察するうえで興味深い提言となるし、周恩来が「中共情報三傑」と呼んだのは銭壯飛、楊登瀛、胡底であり、李克農はもとの中共情報組織の英雄であったと説いて、銭壯飛らと関係に一線を画した。そして中共の内情を熟知する銭壯飛は結局、長征の過程で周恩来に抹殺されたと説くのであった。周谷の評論はまさしく周恩来の銭壯飛に対するストーリーの創作を示唆するものであった。

周谷の文章は客観的な論証を積み上げたものだけに説得力があった。にもかかわらず、周恩来が「龍潭三傑」と持ち上げた李克農、銭壯飛、胡底の顧順章事件における関係はまだまだ不可解なところがある。南京の国民党特務総部―大本營に潜入していたのはいったい誰であったのか。銭壯飛はほんとうに何成瀆、蔡孟堅の徐恩曾宛の機密電報を解読して上海の周恩来に伝えたのであろうか。周恩来の指示で国民党に潜入し

たという李克農、胡底、錢壯飛はじつさいどのような関係にあったのであろうか。このような疑問を以下に錢壯飛の足跡から見てみよう。

ii 北京の錢壯飛

顧順章事件でもっとも早く錢壯飛が果たした役割を述べた周文琪は、李克農、錢壯飛、胡底「三傑」の結成の経緯をこのように説いている。

「一九二七年十一月、周恩来が上海に帰ってくると、真っ先に情報保衛機関——中央特委を設立した。この年の十二月、党中央は有能な幹部を敵の内部に潜入させ、直接敵から情報を得ることを決定した。周恩来は直接指導する特科から李克農、錢壯飛、胡底を選んで敵の要害部門に潜入させることにした。彼らは一九二七年の大革命失敗後に、国民党支配区で敵と闘争した我が党の情報工作の三傑と称せられた」

党史の基準を作った周文琪は、周恩来は早くから三人組を国民党の情報機関に潜入させることを決めていたといい、特科の中から有能な三人を選出したとした。これは一九二七年十二月のことであったという。ただ、このあとに周文琪自身が述べるように、錢壯飛が上海に逃避し、徐恩曾の上海無線電訓練班に合格し、上海無線電管理局局長に就任した徐恩曾に気に入られて管理局秘書になったのは、二十八年冬のことである。

二十九年春、陳立夫は国民党建設委員会の主任を兼任すると、徐恩曾を浙江杭州に派遣して西湖博覧会の事業を担当させた。徐は錢壯飛に協力をもとめ、浙江省建設庁の秘書にした。錢壯飛は徐恩曾の好感と信任を得るために、仕事の上では「公のために力を尽くし、法を守り、勤勉忠実に勤める」態度を取り、また錢壯飛は美術を理解したうえに、書が上手で、博覧会を企画する知識があつて、博覧会を運営するのに欠かせない人であった。錢壯飛が企画した博覧会はすこぶる好評を博した。こうして、錢壯飛はますます徐恩曾に重宝された。一九二九年九月、博覧

会が終わると、徐恩曾は上海無線電管理局に返り、錢壯飛を個人秘書にした。二十九年十一月、錢壯飛は上海の映画会社で胡底と再会し、ここで胡底から李克農を紹介される。この時、李克農は上海滬中区委の宣伝委員で、錢壯飛は徐恩曾との関係、そこから得た

情報を李克農に語り、また李克農に上海無線電管理局でラジオニュースの編集をするよう勧誘した。李克農は錢壯飛の話を党中央に報告したので、党中央は錢壯飛が国民党○○系の徐恩曾の身辺である程度の地位を得て、重要視されているのを知った。それで、国民党の心臓部に潜入する特別小組グループが結成されたというのだった。

錢壯飛が一九二五年（一説に一九二六年）に入党して以来、当初から中共特

科が指導して医者イシヤの職業を隠れみのにして党の「基礎活動」に従事し、徐恩曾の機密秘書になると、国民党情報本部（大本營）から「敵」の情報を探知し、錢壯飛の最大の功績は顧順章の叛変によって党中央の絶対的危機を救ったという党史の原則的なストーリーを党史作家たちは各自の課題で強固に作品に補足したが、しかし、錢壯飛はどういう経緯で徐恩曾の秘書になれたのか、錢壯飛がぐうぜん胡底と「再会」し、なぜ胡底からとつぜん現れた李克農を紹介されたのか、李克農はどのような関係で上海無線電管理局に入れたのか、李克農はそれまで中央特科とどんな関



写真1 「龍潭三傑」左から李克農、錢壯飛、胡底

係があったのかなどの記述は、すべて錢壯飛の積極的な意志で推移したように語られているが、説得力のある説明は見られなかった。

周恩来が意図的に称賛した「龍潭三傑」に李克農が組長となって国民党の情報本部（大本營）に潜入させ、敵の情報を獲得しようとした経緯について、党史にもとづく錢壯飛伝記の決定版を書いた葉炳南はどのように語っていたのであろうか。

「一九二八年の後半に、錢壯飛は上海国際無線電信管理処で仕事を、広告画をデザインし、客の勧誘などに従事した。それは国民党の秘密特務機関ではなかったが、しかし我が党にとって言えば、黨員の骨干を隠蔽し、無線電信の送受信技術と関係情報を掌握するの有用なところであつた。このことから、党支部は錢壯飛を長期間潜伏させる計画を決定し、錢を他の活動に参加させることはなかった。ほどなく、李克農もこの管理処に来て工作した。彼と李克農の組織関係は中央特科に移され、特科二科（一九二八年四月に成立）科長の陳賡（仮名は王庸、後に周恩来に協力して特科を指導する）の単線指導に直属した」

「一方、一九二八年の冬、国民政府の建設委員会秘書長に就任していた陳立夫は勢力を拡大し、党羽を陪植するために、あらゆる方法でいくつかの重要部門を掌握し、すぐさま悪魔の爪を上海国際無線電信管理局に伸ばした。彼は元の処長を取り込もうとしたが、後に同郷で表親（父の姉妹または母方の親戚）であり、またアメリカ留学の同級生であつた徐恩曾を配属した。徐は管理処に赴任すると、錢壯飛が同郷で、人となりも頭脳明晰、実行力に富み、交際がうまかつたので、管理業務の援助を求めた。徐恩曾は表向き、温厚で上品な書生のもようであつたが、実際は、心狼手辣、貪財好色であつた。彼には幾人かの愛人、情婦がいたが、みんな彼の慰みのおもちやであり、ある者は彼の反革命活動の道具であつた。公然と同棲していた元共産黨員の費侠は留ソ学生を買収して国民党に協

力させた。またその頃、王という愛人がいて、徐は家で老婆と言ひ争うのを恐れて、錢壯飛に彼女のために適当な家を探して欲しいと頼んだ^⑭。葉炳南は上のような私的なことも錢壯飛は党の指示を仰いだと書いている。

党は研究の結果、あっさりとして錢の家族が住んでいる二樓の前房を愛人の住いに与えることに決めた。これらの女性たちは錢壯飛が徐恩曾に取り入るための手段として重要な関係があつた。党が錢壯飛にそうさせるように指図したのか、錢壯飛の思惑で女性の世話をしたのか、徐恩曾との関係を知るうえで軽視できない要素となる。党史は一貫して錢壯飛のあらゆる行動に党が指示を与えたとする。

「こうして、錢壯飛はさらに徐恩曾の好感と信頼を得ることができたうえに、また錢の家族のためにひとかどの十分な安全な政治保護の傘を獲得し、党組織の連絡点と会議を開く場所として用いるに利した。果然、徐恩曾は錢壯飛みずから王という愛人を按配してくれたことに十分満足し、その上、錢壯飛を自分の左右の手として頼つた」^⑮

「一九二九年、徐恩曾は国民党浙江省政府建設庁長に転任したとき、錢壯飛の家族を杭州に連れて行き、まるで計影離れざる如きであつた。この年に浙江省建設庁は大規模の西湖博覧会を開催し、錢壯飛は徐恩曾に協力して博覧会の企画と事務の準備を進め、ここで卓越した才能と組織能力を顕して徐恩曾のいっそうの賞賛と信頼を得た」^⑯

この年の十二月下旬、徐恩曾は前任者葉秀峰の後を継いで党務調査科科長に就任すると、真つ先に錢壯飛に協力を頼んだ。

「陳立夫と私は党務調査科を基盤として反共を主要な任務とした巨大な特務機関を設立する準備をしている。蒋介石の軍事、團剿に協力し、白区の中共組織を破壊し、特に中央の動揺分子に対して軟化を勧める、自首政策^⑰を用意し、これらを利用して探偵、奸細^{スパイ}をさせて、中央内部に

潜伏して秘密活動を行う……。徐は銭壯飛に中心的な助手になって、特務系統を設立して拡大するのに協力して欲しいと求めた。銭壯飛はただちにこの重要な情報を党組織に相談し、中共中央の責任者周恩来はこう指示した。君たちが奴をつれて来い！^⑮こうして中央特科は銭壯飛、李克農と胡底の三人の同志を国民党の最高特務組織に潜入させることを決め、また彼ら三人が党中央指導者に直属する単線指導の特別小組を作り、李克農が組長に任じ、工作中的の重大な問題は党小組の集団討論で決定し、その後それぞれが分かれて行動した^⑯」

周文琪、葉炳南や周恩来の情報活動を体系的に著した穆欣の銭壯飛評論は、これまで何度も指摘してきたように、銭壯飛の行動を党の積極的な指導、指示のもとにあったと説くので、さきのいくつかの疑問にはつきり答える記述はなかった。

しかしじつさい、話はすべて逆であったのが真相であったろう。党中央は銭壯飛を特科の間諜に取り込むため、銭の妻、張振華と知己の胡底を仲介して李克農を銭壯飛に接触させ、銭壯飛を党の忠実な使徒に仕立てたのである。「他^{やっ}を連れて来て、我が党のために利用しろ」と周恩来が李克農に命じたのはこの事情をよく表している。「他^{やっ}を連れて来い」の「他」に党史作家はわざわざ国民党情報本部を指すと注記するのは故意に事実を糊塗するものに他ならない。銭壯飛を特科に取り込む際に周恩来が直接、銭壯飛に会って説得したかどうかは重要な事柄だが、南京で極秘電報を受領した銭壯飛がどう処置すべきか判断を迷ったとき、脳裏に周恩来のこのような声が聞こえてきた。

「この崗位^{もちば}はたいへん重要だ。君の代わりに誰かがやれるものではない、どうあっても正体を現すな！」

党史作家は上海の周恩来に情報を伝える時だったとするが、周恩来が銭壯飛を特科に取り込むときの説得の言葉であったろう。中央特科にこ

うして李克農を組長とする特別チームが組織され、国民党の軍事、党内情報を探知したのであった^⑰。

周恩来の中央特科が国民党の上層部とつながりがあり、中共党に利用できる人物を物色していた例に楊度の入党工作がある。周恩来は楊度が国民党の内部事情に詳しいのに眼をつけ、特科の情報科長であった陳賡に接触を命じる。陳賡は楊度と同郷の人物を近づかせ、秘密黨員に誘い込んだ。楊度は時代の寵児であったから、周恩来が入党の紹介人になった。しかし、大学の楊度を夏曦と同行して江湖の根拠地に派遣し、革命の実践を体験させた。前節で取り上げた董健吾の入党の場合も特科の巧みな勧誘があり、特科に叛徒を鎮圧する任務を命じられ、党にたいする忠節を試された。党を裏切るところなるぞ、ということ身を以って体験させたのだ^⑱。

iii 銭壯飛の実像

いったい党史はその時々々の党の路線を正当化するうえに組み立てられる。とりわけ人物の評価は政権を担う人物やその基礎を建てた人物とのかかわりの如何によって評価が定められる。うえに挙げた周文琪および譚宗級の党史は周恩来の情報政策の立場に立って論述されている。ストーリーがまず作られて、それに附合する証言を積み重ねて「事実」を語るのは、歴史研究者がよく採用する手法であるが、党史に語られる「事実」はそれを代表する歴史である。したがってここには、周恩来の立場が不利になるような言論はなく、すべてが事実として語られる。では、党史は真実の追究にまったく無用かといえそうではない。周文琪、譚宗級の党史は銭壯飛を論じた早い時期のものだった。それ故、銭壯飛に対する生の（のちに加えられた意図的な潤色のない）新鮮な実像が遺されている。もちろん新鮮とはいえ周恩来の情報政策を正当化したうえに書か

れていたが、それが却って真相とは異なる事実を暗示するものだった。顧順章事件における錢壯飛の行動は、じつは周恩来の巧妙な策謀がめくらされていたのである。

《環球人物》誌の特約記者肖岱は、顧順章事件における「三傑」の存在を以下のように述べている。顧順章事件において核心的作用を起こした錢壯飛、李克農及び胡底はみな周恩来が隱蔽戦線中に布石した「閑棋」であり、平時は動かないが、風雨突變の時逆に荒れ狂う波をおしとどめることができたという²⁰。では、周恩来の策謀とはいったいどのようなものであったのだろうか。錢壯飛が顧順章事件にかかわることになったのは、じつは次のような経緯があったのである。党史の裏面に隠された錢壯飛のほんとうの生きざまはどのようなものであったのであろうか。

葉炳南の正伝によれば、錢壯飛は一八九六年、浙江省呉興県（いまの湖州市）の呉城で生糸の売買をしていた商人の家に生まれた。けして豊かではなかったがまずまずの家庭に育った錢壯飛は、呉城にあった省立第三中学に進んだ。しかし、在学中に父が病死すると、一家の運命は急変する。母の范氏は仲人に頼んで本城で勇豊布店を営んでいた徐家の娘、徐双英と結婚させた。徐家の持参金が婚約の条件であった。二年目の一九一五年、女の子、のちの錢椒が生まれる。錢壯飛は省立三中を卒業すると、北京医科専門学校に入った。

別の記述によると、父の商売は外国資本に圧されて経営が行き詰まり、一九一二年、十六歳の錢壯飛を遺して憤死した。父が死ぬと、錢家は山ほどの負債を抱え、加えて生糸業の掛け売り金も回収できなかった。一族の中には先祖の遺産を争い、力づくで奪うことも辞さず、法廷に訴えるものが出てきた。不正役人、訴訟ごころは機に乗じて言いがかりをつけてゆすり取ろうとし、役人は役人で錢壯飛を捕まえて罪を問うと高言した。錢の家庭はめちやくちやになり、崩壊寸前になった。屈強で機智に

富む母は子どもが紛糾に巻き込まれるのに忍びないので、錢壯飛を北京に送って勉強させ、自身は一人で止まることのない糾紛を防いだ²¹。

子どもに早々と結婚させたのは前述のような学費を得るためで、中学校を卒業できたのは妻の経済的支えがあったからであった。北京での学業も人の援助に頼った。錢壯飛は北京に移ってくると城南の湖州会館に住んだ。湖州会館は北京にあった同郷会館ともいうべき建物で、かつては北京で科挙を受ける受験生が宿泊し、湖州出身のまだ出仕していない人が管理した。ここで錢壯飛は一族の錢玄同の大きな援助を得て、北京国立医科専門学校に入ったという。錢玄同は陳独秀らと新思潮をリードした新進の学者で、年の離れた長兄の錢恂は外交官として日本に駐在したことがあり、その夫人単士厘は女性として始めて西洋を旅行した開明的な婦人として知られる。この頃、錢玄同の家にはよく陳独秀や胡適がやって来て時局や政治についてさかんに議論をたたかわせた。錢壯飛もしばしば錢玄同の家を訪ね、よく彼らの思想の交流や問題の討論を聞き、新思想の啓発を受けたという²²。

この話はすこし錢壯飛を誇張しすぎる。錢壯飛は経済的苦境から一刻も早く逃れたかったに違いない。それほど近い親戚でなかった錢玄同をよく訪ねたのは彼らの新しい思潮への関心より、現実の困窮を解決する助言を錢玄同に求めたのであろう。この頃、錢壯飛は二つ年上の同級生、張振華と知り合った。張振華の実家は祖先に宰相に登った大官がいたほどの安徽桐城の名望家で、経済的にも裕福であったので、錢壯飛はずつと張振華から経済的援助を受けて学業を続けた。一九一九年、医科専門学校を卒業すると、二人は北京で家庭を持った。倪良端は一四年のこととするが、それは徐双英との結婚のことであろう²³。

二人の男女関係はどちらが積極的であったかは分からないが、錢壯飛と張振華の結婚は経済問題が大きな理由であったらう。陳棻徳などの党

史作家の記述によれば、錢壯飛が医科専門学校に入学したのは一九一五年であった。この年に長女の錢椒が生まれている。一方、三十年代の著名な女優であった黎莉莉を紹介した文章には、一九一五年の生まれ、浙江呉興（現在の湖州）、祖籍は安徽桐城、原名は錢蓁蓁とある。錢蓁蓁は言うまでもなく錢壯飛と張振華との子であった。とすると、錢壯飛に母親違いの二人の娘ができたことになり、すでに張振華と知り合っていたことになる。作者が二人を混同しているのかも知れない。

娘の錢蓁蓁については、他に詳しい記述は見当たらないので、ここで女優黎莉莉のプロフィールを紹介しておこう。



女優、黎莉莉のプロマイドとプロフィールを紹介した文章

明星女儿

钱壮飞和妻子李新华共有二子一女。分别是钱江、钱楠（后改名为钱一平）和钱蓁蓁。当时因为顾顺章事件，钱壮飞不得不连夜离开南京。钱壮飞离开南京时，考虑到带着女儿和年幼的儿子不方便，只好忍痛将他们留下。他在办公室内给徐恩曾留了一封信，说明二人改姓不同，但不要提及孩子，否则便要弄来政治嫌疑。徐恩曾和钱壮飞在生活上的一些隐私都暴露出来。事后，钱壮飞的女儿、女婿和儿子都被监视。不过，徐恩曾中受担心短处被揭发，天得一死时间又将他释放。但钱壮飞却从此再也没能见到自己的儿女。

钱壮飞的女儿钱蓁蓁就是上世纪三四十年代大名鼎鼎的明星黎莉莉。在和父亲合拍《唐山隐侠》后，当时年仅11岁的钱蓁蓁就此踏入银幕。1927年，

周恩来就确定下达这一特殊工作的原则：建设有坚定革命意志的隐蔽战线。他不能像反动派那样靠金钱和美色。据记载，1933年，国民党特务机关利用顾顺章介绍的共产党中央特务情况，编写了一部名为《特务工作之理论与实践》的教材，书中也不得不承认：“CP（注，英文“中共”的缩写）的特务人员对于政治有充分的认识，对于党

写真2 錢壯飛の娘 黎莉莉

黎莉莉は
きわめて非
凡な家庭に
生まれた。
父母はとも
に中共地下
党員で、と
りわけ父親

の錢壯飛は中共中央の安全を保障するために重大な貢献をなした。

彼女の父、錢壯飛は一八九五年に生まれ、原名は壯秋、別名は錢潮、一九二五年に中国共産党（一九三五年の第五次反圍剿中に壮烈な犠牲を遂げた）に加入した。彼の社会的な身分は「北京光華影片公司脚色監督」であり、労働者の運動に従事したことがあった。黎莉莉の父母は中共地下党員で日夜、党の工作に忙しかったので、黎莉莉の日常生活の面倒を見る暇がなく、かの女の小さい頃の生活はあちこち放浪して過ごす日々で、私塾の寄宿学校で勉強して、教会の寄宿

小学校、孤児工読園等が上がった。当時では人に軽蔑された劇班（興行劇団）で京劇を学んだことさえあった。それは食事や眠ることができ、人に「面倒を見てもらえぬ」場所を持つためであった。父母は彼女の命の安全を考え、彼女の身边に一旦不測があったら、彼女の命に脅威をもたらすであろうと思った。ちょうどこの時、錢壯飛は新聞に「中華歌舞団」という歌舞団が南洋に公演するために新しい練習生を募集している広告を見て、すぐに黎莉莉を申し込みに行かせた。思いもよらず歌舞団の座長黎錦輝に一目で気に入られた。天賦の演技力に富み、かつまた歌、踊りの上手な黎莉莉は座長黎錦輝の調教のもとで、歌、踊り、演技などの面で長足の進歩があり、またたく間に歌舞団中の幹部俳優の一人となり、同時に有名な王人美、徐来、黎明暉らの大名人と「肩を並べて」歌舞台のうえで活躍した。一九二九年二月、南洋に公演していた中華歌舞団が解散すると、帰る家がなかった黎莉莉は座長黎錦輝を干爺とし、かつ原名の錢蓁蓁を改めて黎莉莉とした。

錢壯飛にはすでに徐双英と結婚していたはずで、その妻から大きな恩恵を受けていながら、平然と新たに妻を娶る錢壯飛の精神にはとうてい理解できない。錢壯飛のこのような女性を利用する性向は後の処世術のうえにも現れていた。

結婚後、故郷から老婆の范氏が北京の錢壯飛のところに訪ねてきた。老婆は息子が別の女性と結婚していて、すでに跡取り息子がいるのを知った。この老婆は現代的な大足の嫁を好まなかったため、故郷に帰って嫁の徐双英とその娘を連れてふたたび北京にやって来た。母にはすでに生まれていた跡取り息子を徐双英の子として育てようと思ったのであろう。ところが母の思惑はみごとに外れた。家の格としては張家のほうがはるかに上だった。かくて錢壯飛一家の奇妙な同居生活が始まった。

錢壯飛の母范氏、太太の徐双英と娘の錢椒、もう一人の妻張振華とその子の錢江、長女錢蓁蓁、（後に生まれた錢一平）という家族構成であった。当時の中国の社会では妻妾が一つ屋根の下で同居する光景はさほど珍しいものではなかったが、錢壯飛の家族はやはり異様であった。錢壯飛の生活は経済的にも精神的にも多く張振華に依拠していたのであろう。このことはのちのちまで錢壯飛の行動に大きく影響した。ある党史家は二人の妻が同居する状態を「徐双英、張振華は互いに礼をもつて相待し、和睦で相處することができ、家庭内はずっと平安無事であった」と説明して、張振華が錢一家の中心的存在であることを印象づける。^⑤

これはずつとのことであろうが、太太の徐双英は姓を錢に改め、錢双英と名のつた。この改姓の意図は分からないが、張振華が名実ともに錢壯飛の妻となったことを表している。おそらくこの時から、錢壯飛と張振華との間に生まれた子どもはみんな母の本籍の桐城の人と称した。錢壯飛が特科の間諜になったことと深い関係があるに違いない。

医科専門学校をでたあとも錢壯飛をとり巻く経済的環境は一向によくならなかった。錢壯飛は前述のように、はじめ北京で行医の看板を掲げたが、経営が成り立たず、すぐに京綏鉄道付属病院で働くことになった。勤務を終えると美術学校で解剖学を教え、その後また小さな新聞社で編集の仕事をした。妻の張振華も天壇伝染病院の医者になった。医者 technician 術においても張振華のほうが勝っていた。錢壯飛は医業にはあまり熱意がなかった。彼はもともと手先が器用で、いろんな方面に関心をいだき、才能を発揮した。書法、絵画が得意で、さらに劇本を書き、俳優にもなった。一九二六年前後、錢壯飛は張振華の出資を得て、北京の護国寺付近に光華映画会社を設立し、家族の住いも会社内に移し、映画を演出し、子どもとともに出演した。しかし余りにも生活が苦しいので、北京を離れて馮玉祥軍の軍医になった。しかしここでも薄給に悩まされた。加え

て毎月の給与が滞り、夫婦は早々に退散した。張振華はこのことを二度回想したことがあった。一度目のときは、「私たちは北京で安穩としては居られなかった。医者になってもダメで、教師になってもダメであった」、そこで開封に行つて兵隊になつたと馮玉祥軍の軍医になつたのは北京にいたときだったと語つた。二度目のとき、同じ話題に、「錢壯飛が北京を離れて上海に行つたのは一九二七年の冬であり、上海から馮玉祥の部隊に行つて医者になつたのは一九二八年の夏であった」といい直した。代表的な党史作家の穆欣は、関連資料から見ると二度目の話が正確であると歴史の事実を判定した。しかし、北京での錢壯飛夫婦の経済問題への焦燥感から見れば、張振華の前者の告白の方がはるかに事実に近いであらう。党史なるもの本質が窺えて絶妙である。^⑥

ところで、この時期で党史が欠かさず指摘することは、錢壯飛、張振華が共産党に加入したということであった。錢壯飛の入党に関わつてはじめて胡底という人物が登場する。周恩来が称賛した「三傑」の一人が胡底であったが、しかし、じつさい胡底がどんな活躍をしたのかはつきりしない。その胡底の事跡を詳細にわたつて述べた一文がある。作者の姚永森は中共安徽省蕪湖党史委員会の研究者である。したがつて党史が描いた胡底評ということになる。

姚永森によれば、胡底は、原名は胡百昌、またの名は胡北風で、胡馬、裳天、伊語等の仮名の仮名を使った。一九〇五年に安徽舒城县新街郷松園村の商工業兼地主の家に生まれた。十四歳のとき、五四の新思潮に感化して舒城县の城関にあった洋学堂―私立植民小学高小班に入学した。小学校の途中で省立第二中学に移り、胡底はここで楽器に対して異常なほど熱中して、あらゆる楽器を会得した。「舒城の才子」と人びとに呼ばれたという。

この時期、胡底は急速に左傾化していったと姚永森は強調する。ある

春節の前夜、家人から胡家が経営している竹木行と糧行に對聯を書くように頼まれた。胡底は赤い紙に墨跡でこう書いた。

庶政は日に非くなつてゐるのに、どうして革命に走る人はいないのか。

商業は蕭瑟の^{あれはててもさびしい}に、誰か空しくこの一年を過したものが有ろうか。

これを見た父と祖母はびっくりして、この「馬鹿息子」と怒鳴りつけた。

一九二三年七月、胡底は中学を二年いて大学を受け、北京中国大学に合格した。しかし次の年は、胡底の人生にとって大きな転換期になる。祖母と父は胡底に一言の相談もなく婚約者を決めるが、固く拒んで実家との関係を断つたのだ。この頃、実家との関係に悩んでいた胡底は同級生の呉鹿鳴の紹介で北京の安徽会館で張振華姉弟と知り合い、また張振華の夫の錢壯飛とも知己となった。ただ、べつの記事では、この時まだ中国大学の学生であった胡底は同じ安徽会館で住んでいた張振華と知り合い、すでにひそかに中共黨員になっていた張振華の影響と推薦で、二十五年に張振華の弟張暹中の紹介で胡底と錢壯飛は中共に加入したともいう。胡底、張振華、錢壯飛の入党に時期については、中央調査部の舒城県委に宛てた手紙によれば、胡底がさきに入党し、二十六年に張振華と錢壯飛はいっしょに入党した。彼らの入党はみな張暹中が紹介人となっているから、安徽会館が共産党の活動拠点となっていたのであろう。合作以後の共産党勢力の浸透ぶりが窺える。張暹中は中共早期の黨員であったという以外は詳しくないが、張暹中が仕掛け人となって張振華、胡底を引き込み、張振華の熱心な勧誘で錢壯飛も入党することになったのであろう。

国共合作が成立して以来、国民党を隠れ蓑とした共産党の勢力は飛躍

的に拡大した。共産党への共鳴は一種の社会風潮にもなった。社会の流行に敏感であった錢壯飛は妻の助言で躊躇なく共産党に参加した。しかし、この錢壯飛のいささか軽薄な決断はのちに周恩来の情報政策に巧妙に利用されることになる。肖岱がいう「閑棋」でしかなかったのである。しかし、党史作家は、身を犠牲にして党に尽力したという錢壯飛、胡底を誇張して語った。入党した胡底は「全身全霊を革命に投入し、いつもピラを撒き、ポスターを貼り、文章を書いて、党の宣伝扇動の工作を進めた」といい、錢壯飛も「行医の便宜を利用して、貧困の患者に社会の動きを解させ、大衆と朋友の交わりをし、党の主張を宣伝し、貧困の大衆の中に党の影響を拡大した」という。

前出の姚永森によれば、一九二六年九月、胡底は中国大学を卒業すると、錢壯飛の家に同居した。錢の家はすこし贅沢な西洋風の住宅で、当時、中共北京党组织の秘密アジトの一つであった。この家の表向きはかなり豪奢で、毎日、鈴を鳴らす包車^{じんりきしや}が出入りし、門前にはいつも馬車の往来が激しく、客の行き来が絶えなかった。しかしこの家の主はそれに引きかえひどく貧しかった。党组织からのわずかの経費と壯飛、振華夫婦の収入ではこのような大きな構えを維持するには足らず、胡底と錢壯飛の家族は人に知られないようにこっそりと棒子粉の窩頭^{うわとう}（トウモロコシと大豆の粉で作った粗末な饅頭）や白菜の疙瘩湯（すいとん）を食べる生活であった。

党史の大家、穆欣も胡底についての一文を書いている。相変わらず党を美化する常套文句が連ねられているが、著者しか見ることができない材料を使っているかも知れないので、つづけて引用してみたい。

一九二六年、胡底と錢壯飛は錢の内弟張暹中の紹介で中国共産党に入った。この年、許光華は光華影片公司を創設し、胡底と錢壯飛、張振華夫婦は俳優になった。彼らは映画で主役を演じ、他方でこれに借りて

党工作を掩護した。彼らはいつもしよに党活動に従事した。党の会議は錢壯飛家のマージャンの卓上で行なわれた。錢壯飛夫婦はなお「行医」の名目でつねに党の秘密文書やスローガン、ピラを赤十字マークの革靴に入れて、往診の形式であちこちに運んでばら撒いた。胡底はなお彼らと夜陰に乗じて通りに出て活動し、ピラを住民の戸の隙間に差込み、街のあちこちの大通り横丁に貼り付け、いつも反動警察、特務と胡同で、目隠し鬼ごっこをした。張振華はのちに当時の北京における秘密活動の状況をこう語る。ある日のこと、錢壯飛、胡北風、錢双瑛と私は、みんな綺麗な服を着て北海公園にいつて船を漕いだ。まさに船が湖心に近づくと、小さく巻いたピラを取り出して、みんながそれぞれ公園の各場所へ貼りにいった。当時、ピラを撒くのはいつも夜に出かけてゆき、こっそりと人家の戸の隙間に差し込んだ。あるとき敵に追跡されたので、すぐに手に持っていたピラを置いていそいで逃げた。これらの活動の中で胡底はすべてに活躍した積極分子であった。

この映画会社は、二七年の初めに錢壯飛と胡底が北京護国寺路東路の院内に「光華影片公司」という映画会社を設立したともいい、姚永森は党の命令を受けて許光華という人物と合弁で設立し、錢壯飛と胡底は監督、俳優の身分で革命運動に従事したと述べる。さきに紹介したように張振華が出資して、錢一家はみんな名前を変えて撮影所に住み込んだ。映画会社は許光華が設立し、張振華の出資で、錢壯飛が運営したしたというのが実態であろう。だが党の活動をカムフラージュするために映画会社を設立したのではなかった。映画の製作は「多芸多才」の錢壯飛の趣味の一つに他ならず、妻の出資で実現した錢壯飛の道楽事業なのであった。党史作家たちが語る錢壯飛一家の党活動の様子は滑稽な作り話に見える。穆欣は彼らの秘密活動を張振華の回想を引いて語るが、一家の総勢が着飾って行楽に出かけるのはかえって人目につくのではないか

と懸念をする。ここに出てきた錢双瑛は錢壯飛が湖州で結婚した徐双英のことで、錢の母は張振華が大足であったので好まなかったというから、錢双英は纏足をしていたに違いない。歩くにも覚束ない女性が秘密活動などできるものだろうか。

北京での錢壯飛は家族の生活を維持するのに精一杯で、党活動にそれほど熱心ではなかった。先の穆欣の一文の中で胡底だけが活動した積極分子であったというのは党の事情に通じている正確な指摘であった。錢壯飛、胡底らが北京に居られなくなったのも胡底と実家との事情が原因であった。

iv 機要秘書 錢壯飛

錢壯飛が北京を逃れて上海に移ってきたのは一九二八年のことで、一家は上海仏租界甘司東路辣斐德路新興路順里四号に住んだ。

党史の主張では、すでに述べておいたが、二七年四月の李大釗の逮捕、処刑の後、北方地区の党組織は破壊され、錢壯飛は身分が暴露して北洋軍閥政府に指名手配された。党組織の周密な按配によって、この年の冬、胡底とともに北京を脱出したというものだった。だが、はたして錢壯飛は指名手配されるほど著名な活動家であったであろうか。すでに見てきたように、錢壯飛は党活動にさほど熱心ではなかった。積極的な活動家であったのは穆欣がいうように胡底のほうだった。故郷では舒城県国民党清党委員会が胡底の実家を監視し、父の胡緒意に胡底を連れ戻して自首させろと脅迫した。おどろいた父は北京に駆けつけ、胡底に故郷に帰り、いごはいっさい共産党と手を切るよう説得した。姚永森は、このとき（二十七年の末）、党組織は胡底と錢壯飛に南下して上海に移転するよう通知したばかりで、胡底は党の指示にしたがって父の忠告を即座に拒絶して上海に潜入したと述べている。上海では錢壯飛と胡底は一時

党との連絡が絶たれ、党活動が中断したように党史の筋書きが描かれるが、錢壯飛、胡底がこれまで党に重要な貢献などしていなかったことを糊塗したのに過ぎない。故郷ですこしは名の知れた胡底は上海で姿をくらし、逃避するが、党との関係が希薄だった錢壯飛は家族の生活のために職探しに奔走し、やっとのことで上海市工部局に人力車の鑑札を書く臨時差事の職を得た。工部局は租界の行政を総管する政庁で警察業務が主要な職務であった。錢壯飛が得たのは大都会の中のごく小さな仕事であったが、党の活動家なら考えられない危険な場所であった。

あくまで党の指導を受けていたと主張する倪良端は、北京を離れる際に離れ離れになった胡底の連絡をひたすら待っていた錢壯飛は手を尽くして党組織を探したと述べる。一方で生活問題を解決するために積極的に職を探したと党との関係を第一に考える錢壯飛を浮き彫りにする。

しかし、じっさいはそれぞれどころではなかった。錢壯飛は新聞の「招聘啓事」に目を凝らし、やがて国民党上海無線電訓練班が受講生を募集しているのを見つけるとすぐに応募した。一番で合格した錢壯飛は優秀な成績で訓練を終えると、上海国際無線電管理局に就職した。しかし錢壯飛が担当したのはポスターを画いたり、応募書類を作成するなどの広告、宣伝の仕事であった。しかし、無線電管理局局長の徐恩曾に高く評価され、局長秘書に抜擢される。錢壯飛がどのような経緯で徐恩曾に信頼される関係を築いたのかは、すでに本稿でも疑問を呈していたが、じっさい「三傑」と称賛される発端となったにもかかわらず、党史作家の間でも見解は一致していない。

錢壯飛は周恩来が隠蔽戦線の中で布石した「閑棋」であったと指摘した肖岱は、しかし、「錢壯飛はどのような関係を通じて国民党情報機構に進入したのか。これに対してたしかかな歴史記載はない」と述べ、二つの見解を紹介する。一説は、錢壯飛が西湖博覧会を主宰した時に徐恩曾と

交際したという指摘で、もう一つの説は、どうも肖岱はこのように考えているようだが、錢壯飛は無線電訓練班に応募し、試験を受けて一番の成績で採用された。錢壯飛はこの訓練班が国民党の特務組織に属するのを知って入ったのではなかった。錢壯飛は人より過ぎる才能を示し、また特務の首領徐恩曾と同郷だったので、徐恩曾は彼を転任して機要秘書にすることを提案した。錢壯飛は、関係は重大であると感じ、すぐに党中央に指示を請うた。周恩来はまたとない機会だと思い、国民党の特務組織を連れて来て党に服務させようと提案した。こうして、錢壯飛は国民党中央組織部調査科に進入し、徐の機要秘書を担任したという。

肖岱が紹介した後説は多くの党史作家が説く通説ともいえる見解であるが、上記の説明には少なからずの混乱があり、さらなる説明の補足が必要だろう。ここでもう一つの見解を加えれば、早くから特科が錢壯飛を徐恩曾のもとに送り込んでいたという説である。党の指導をことさら強調する党史作家の山丁は、錢壯飛が陳賡の指示を受けて敵の心臓に打ち入ったのは一九二八年であったという。この時、党中央はすでに、党支部の決議をへて、一、二人の忠実で信頼できる同志を国民党部や何らかの反動機関に派遣して偵察や破壊工作をさせる決定していた。この年の夏、国民党浙江省電報局局長徐恩曾が上海で開設した無線電訓練班に、錢壯飛は陳賡の指示にもとづいて試験を受けて採用されたというのである。錢壯飛が徐恩曾に取り入ったのは、徐が同郷の浙江湖州の人で、錢壯飛はたくみにこの小老郷（同じ県同郷）の関係を利用し、また自分の多才多芸を売り込んでまたたく間に信任を得たのであった。

二七年の末、すでに特科との深い関係があったというのは、錢壯飛が北京を離れて上海に逃避するのに党の周密な按配があったのと符合するが、どうしても錢壯飛が忠実で信頼できる黨員であったとは思えない。このことはすでに述べておいたが、錢壯飛は自分の身の振り方に必死で

あった。無線電管理局で懸命に徐恩曾に売り込み、意がかなって秘書に取り立てられた。これまでの道楽で身につけた「多才多芸」が大いに役に立った。通説にしたがえば、徐恩曾から決定的な信頼を得るのは、一九二九年春、国民党建設委員会が開催した西湖博覧会のこと以来のことである。国民党建設委員会の主任を兼任していた陳立夫は徐恩曾を浙江杭州に派遣して西湖博覧会を準備させた。徐恩曾は錢壯飛に具体的な計画を立てさせ、錢壯飛は「公務を重んじ、法を守って」、ひたすら仕事に精を出し、また美術や書法に長じていたので、博覧会は成功里に閉会した。參觀に来た陳立夫に賞賛を受け、錢壯飛はいっそう徐恩曾に重宝がられることになった。錢壯飛がこの博覧会に形振り構わず身の振り方を模索した。安定した生活の基盤を築こうとした。家族を率いて杭州に赴任したのはその決意の表れであった。

錢壯飛の人となりを語るとき、よく交際が上手であった（人付き合いがよかった）ことが取り上げられる。錢壯飛は人との関係を築くうえで男女を問わず、相手のことをよく理解しようとした。徐恩曾に仕えるときもそうだった。まず気に入られるために錢壯飛は上司の公私にわたってすべてしらべた。

徐恩曾という人物は、政治的には陳立夫という強力な後ろ盾があったが、世間を知らない^{かねもち}纨绔子弟の出身で、人間的には好色という致命的な欠陥があった。徐恩曾を反動派の敵として敵愾心をいだく党史作家の葉炳南の表現によれば、「徐恩曾は表向きおとなしく上品な書生のようで、普段の言葉づかいは小声でささやくようで、人に会うと顔中笑みをたたえたが、実際は心狼手辣、貪財好色であった。彼にはたくさんさんの愛人、情婦があったが、彼の楽しみ慰みのおもちゃであり、あるものは反革命活動を進める道具でもあった。たとえば、徐と公然と同居していた情婦の費侠は徐を助けて西門宗華、任卓宣（葉青）らの何人かの留ソ学生を仲

間に引き入れて買収し、すすんで国民党のために骨を折った。当時、彼にはなお王という姓の愛人がいた。そのことで、家で老婆と口論になるのを恐れて、錢壯飛に適当な家を探して欲しいと頼んだ。……錢は自分が住んでいる二樓の前房をこの愛人の住いにするにした。こうして、錢壯飛はいっそう徐の好感と信頼を得、……徐恩曾も錢壯飛が自ら王という愛人の住いを探してくれたことに十分満足し、錢を自分の左右の手として頼った」^⑤

葉炳南のこの文脈は錢壯飛が党に貢献するために徐恩曾の信頼を得ようとしたという意図で記述したが、両者の深いつながりの発端として述べたのではなかった。すでに述べたように、上海の帰ってきた中共中央は中央特科を組織し、党に忠実な黨員を国民党本部に潜入させ、探偵と破壊工作に従事させることを決定する。徐恩曾に信頼された錢壯飛の報告を受け、党支部は錢壯飛を長期間潜伏させる計画を決定し、錢壯飛を他の活動に参加させなかったという。しかし周恩来の指令で錢壯飛らが国民党本部や軍総司令部に潜入していたのはもつとあとのはずであり、すでに中央特科の指令があったと説く葉炳南の説明は却って錢壯飛を党のストーリーに整合させようとする意図が垣間見える。

後年、国民党調査科の武漢の責任者であった蔡孟堅は、西湖博覧会の開催に際し、徐恩曾に巧みに取り入ろうとした錢壯飛の行動を語っている。ただ、蔡孟堅の逸話は、晩年にアメリカのスタンフォード大学に学んでいた長女を訪ねたとき、ついでの折に見た大陸の共党刊行物をめくって見て、その中に「壯別天涯」という文章があり、真つ先に徐恩曾、陳立夫の二人の「高名」が目にはいる。この「壯別天涯」は蔡孟堅が顧順章を捕らえた事件を題材にした新劇の脚本であった。脚本の内容は自分が扱った顧案の概況とは、事の是非はたしかに本末転倒するものであったが、蔡孟堅はここで、徐恩曾が大^{スパイ}匪^{スパイ}（錢壯飛）を任用したのは、



銭壯飛（1896-1935）。浙江湖州人。1919年毕业于北京医科专门学校。1926年加入中国共产党。1929年底，根据党的指示，打入南京国民党中央组织部党务调查科，任调查科主任徐恩曾的机要秘书。在这个特殊岗位上，他大智大勇，不断为党获取大量重要情报。1931年4月，长期负责中共中央机关保卫工作的顾顺章在武汉被捕叛变。在这千钧一发之际，銭壯飛不顾个人安危，

写真3

もう一人の銭壯飛

「壮別天涯」を批評するものがあった。脚本はしたがってどうぜんの如く党史のストーリーに

女性共謀びじんスパイによるものであったことを発見し、おそらく陳立夫は今でも実情を知らないであろうと述べる。新劇の脚本から蔡孟堅が偶然に見つけた銭壯飛と徐恩曾が知り合った由来はこうであった。陳立夫は徐恩曾とともに杭州にいて西湖博覧会を参観した。博覧会は銭壯飛が幹事になって企画から運営まで主持して多才な技能を發揮し、百三十七日の開催期間中、二十万人の観衆が入場するほどの盛況を博した^⑦。

徐恩曾が参観したときに、美人の王小姐ミスワンを見て気に入った。銭は仲に立って巧みに取り持ち、徐恩曾の情婦になった。銭壯飛が徐恩曾の機密秘書になるのは、なおあとのことであるが、脚本にはその経緯をこう書いている。

徐恩曾は中央の陳立夫秘書長とアメリカ留学の同級生だったという関係で、先に無線電訓練班の主任になり、そのあとすぐ上海無線電管理局長になった。徐は、銭にまた男女を取り持つ縁があり、また銭は陳秘書長と同郷の湖州であったので、紹介するのに都合がよかった。だから遊び友達になっただけでなく、銭を次々と無線電訓練班および無線電管理局秘書長にし、やがて徐恩曾が中央組織部調査科長に昇任すると、陳秘書長に銭を機要秘書にするよう推薦し、公私関係がはなはだ深かったので、折信、訳電のすべてを銭某に全権を任せた。

蔡孟堅の記述はすでに述べたように国民党の暗黒政治を暴露する新劇

「壮別天涯」を批

評するもので

あった。脚本は

したがってどう

ぜんの如く党史

のストーリーに

よって描かれている。博覧会の会場で銭壯飛は徐恩曾に取り入るために女性を紹介し、仲を取り持って公私にわたる信頼を取り得る。しかし銭壯飛がこのような行動を取ったのは、自己の地位と利益を得るための野心ではなく、中央特科に徐恩曾から国民党の政治、軍事情報を得るのが目的であったというのだ。だが、じっさいは銭壯飛が調査科科长に昇任した徐恩曾の機密秘書になるのは、西湖博覧会閉会後のことであり、党史は時間的な経緯を故意に取り違えて銭壯飛が早くから国民党の心臓部に潜入していた忠節な同志であったことを強調した。

銭壯飛がどのような経緯で南京の国民党情報本部に採用されたかはその中に取り上げるが、中共中央統一戦線部の肝いりで製作した新劇「壮別天涯」や映画「金陵の夜」は、顧順章事件における党の正当性を後世まで顕示しようとしたいわば党史の傑作であった。蔡孟堅は「これらの新劇の脚本や録音テープを何度も見たり聞いたりしたが、とくにその内容は多く自己宣伝、醜悪の隠蔽、逃亡に借りて党の功績を自慢することを指摘するだけで、周恩来が顧順章一家を殺害し、陰險な手段で共党総書記向忠発を死に到らせたことは一字も取り上げない、醜悪で下品な芸術えいげである」と酷評した^⑧。

蔡孟堅は映画に映される事件の細部をさらに検証し、そこから新しい事実を発見した。これらのことは後述するとおりであるが、まもなく指摘できるのは、党史が隠蔽または粉飾しようとした意図が画面のはしはしに窺えることである。

では、じっさいに銭壯飛はどのように徐恩曾、陳立夫に取り入ったのであろうか。「金陵の夜」では、徐恩曾、張道藩（じっは陳立夫）が参観に来たとき、美人の服務員コンパニオンの中から徐恩曾が気に入った王小姐を紹介し、ついに情婦にする。さらに趙小姐を張に紹介する場面があった。蔡孟堅は、これは嘘の逸話をまじえ、意図的に茶化しているとするが、その後、

徐恩曾は王小姐を紹介してくれたことで、銭は何でもやれる能力がある
 と思ひ、前後して銭を任用して自分の無線電訓練管理機構の貼身秘書と
 した。銭壯飛は上海で撮影スタジオを見学し、そのとき、とつぜん以前
 ともに共党に参加した李克農に出会う。映画は銭壯飛が中共特科に関わ
 るようになるのは李克農の役割が大きかったことを印象づけようとし
 た。銭壯飛と李克農がいつしよに共産党に入ったというのは明らかに虚
 偽の作り話で李克農の存在を強調しようとしたのであった。蔡孟堅も、
 李克農の情報工作における存在の重要性を発見し、彼は周恩来の重要な
 助手であり、だから「西安事変」の映画の中で毛沢東、周恩来が李克農
 を「中央委員」の身分で張学良とはじめて交渉させたのは、この人だっ
 たのだと語るのだった。銭壯飛と李克農は互いに当時、身分を偽装して
 いることを告白し、銭はそのとき李克農に周恩来に引き合わせてくれる
 よう求めた。周恩来はその時、すでに手始めに国民党中央の核心に潜入
 しようと思っており、銭壯飛にしっかりと拠点を掌握するよう依頼した。

「夜の金陵」の開幕は盛大に開催された西湖博覧会の正門が大写真にな
 るところはじまる。博覧会の総務責任者の銭壯飛は参観に訪れた徐恩曾、
 張道藩を出迎え、そこで美人の
 服務員を紹介して徐に取り入った。

「夜の金陵」は党の宣伝映画であるか
 ら銭壯飛が媚を売った心理を政治的
 な動機にした。事実関係においても、
 蔡孟堅が指摘するように、参観に来
 たのは徐恩曾と張道藩ではなく、徐
 恩曾と陳立夫であった。この時、陳
 立夫はまだ存命であったので統一戦
 線の配慮から鄧穎超の指示で張道藩



写真4 1929年西湖博覧会の会場入り口風景。中国国家郵政局が発行した絵葉書より。

に変えたのだという。^④

しかし、当時の銭壯飛の脳裏に占めていたものは党に対する忠誠心ではなかった。複雑な家庭事情を抱え、経済的にも困窮していた銭壯飛にとってはそんなことより経済的安定をつよく望んでいた。上海でやっと探し当てた上海無線電管理局はやっと希望をかなえるものであった。まず徐恩曾が主任であった無線電信員の養成所に入り、その後、徐の転任に随って無線電管理局に移る。もともと映画製作とか機具の設計が得意であった技術屋の銭壯飛にとって博覧会の企画、運営を主持する今回の職場に大いに満足していた。もつと局長に気に入られて確固とした信頼を得ようと思ったのである。

だから上司の徐恩曾の性格や嗜好を観察し、見かけはおとなしく上品に見えるが、心は残酷でやり方がひどく、強欲で財をむさぼり、根っからの好色な人物であるのを知ったのである。人の心を見抜くことに長けていた銭壯飛が徐恩曾の性格をうまく利用しない手はなかった。

蔡孟堅は李克農の役割をことさらに大きく描こうとした党史の意図を見抜くことができなかった。銭壯飛が撮影所のスタジオで李克農と遭遇した以下の件の蔡の説明はかなりのラグタイムがある。銭壯飛が李克農と知り合うのは上海の映画会社で監督、俳優をしていた胡底の紹介であった。詳細な胡底の足跡を書いた姚永森によれば、上海に逃亡したあと、胡底は仮名を使って上海映画会社と崑崙映画会社に入り、また滬江映画劇場で監督を兼任した。二十七年の七、八月の間、銭壯飛と胡底は中共仏南区委所属の仏租界党支部で組織生活をしたという。姚永森はこの期間、銭壯飛は「党の命令を受けて」、上海無線電管理局（さきの国際無線電管理処）に職を得、徐恩曾に引き立てられて管理局の秘書に抜擢される。二十九年春、徐は銭を伴って杭州にいつて博覧会開催の準備をし、浙江省教育庁に銭壯飛ために秘書の職を求めた。^④

一方、胡底は映画俳優という身分を隠れ蓑に党組織の指示を受けて俠客映画を多く撮影し、主役を演じた。胡底が映画界で評判をとり、上海灘に名をとどろかせた片子は「崑崙の大盗」で、人びとはアメリカの格闘技スター、范克明になぞらえて「東洋の范克明」ともてはやした。二十八年の末、胡底はとうとう革命家の身分がばれ、大勢の軍警と密探が撮影所を取り囲んだ。胡底は映画の主役のごとく包囲網をやぶり、松江、沿海一帯の村に潜伏し、塩商に混じって温州に逃避した。数ヶ月の間潜んだあと、杭州に移り、錢壯飛の家に住んだ。姚永森は、このとき錢壯飛はすでに国民党特務機関に潜入していて、徐恩曾の機要秘書となり、上海国際無線電管理処秘書の職を兼ねていたのだという。

一九二九年十一月のある日、かねてから文芸を愛好していた李克農は胡底の招きでやって来た上海の映画会社のスタジオで撮影を見学した。錢壯飛も同じくこの映画会社に招かれて来ていた。招待した人はもちろん摯友の胡底であった。撮影の合間、胡底はこっそりと李克農の近くに来て来て、あなたに会わせたい人がいるのですがと告げた。李克農がうなずいて受諾すると、胡底が連れてきた背の高い青年を見ると、その容貌は蒋介石に酷似していたので、思わずびびりしてしまった。錢壯飛は徐恩曾から新しい任命を受けたあと、徐に随って上海に帰ってきていた。

錢壯飛は李克農と胡底に国民党が徐恩曾に特務組織の拡大を主持させようとしていると知らせ、この千載一隅の機会をとらえて有能な中共幹部を敵の要害部門に潜入させてはどうかと提案した。李克農はすぐに滬中区委を通じて中央に報告した。中央特委は即刻会議を開き、国民党特務組織に侵入するかどうかの問題を議論した。別の記録によれば、党内では侵入に積極的な意見と反対の意見があり、周恩來の決断で実行することになったという。この時、周恩來は例のことを口にしたという。

彼を連れて来て、わが党に奉仕させるべきだ。

じつは、周恩來のこのことが何時、何処で口にしたかによって、本節の課題である「誰が顧順章の叛変を知らせたのか」を解明する推理ががらりと変わってしまう。では、周恩來はどんな場面でこのことを口にしたのか、以下に、錢壯飛のじつさいの行動を明らかにして、周恩來のことがばの真意を推理してみよう。

胡底の伝記を書いた姚永森はとうぜん胡底と錢壯飛の関係についてはかなり詳しく語ったが、李克農がどういう経緯でスタジオに招待されたのかは語っていない。胡底と李克農の関係はどの党史もあいまいにして多くを述べていない。胡底から李克農を紹介された錢壯飛は徐恩曾の秘密計画を簡単に暴露する。しかも錢壯飛は二人を徐恩曾のもとに引き込むために管理局の試験を受けさせ、ほんの短時間で無線電の知識を習得し、試験の関門を通過する。こうして彼らは名前を変えて上海の無線電管理局の国際無線電管理処に侵入した。彼らの党組織との関係も地方の支部から中央特科に転換する。特科の責任者顧順章が指導し、王庸の仮名を持つ陳賡が責任と連絡をとることになった。しかし、これらの推移は如何にも不自然な筋書きであった。姚永森のこの一段の記述には忽然と李克農の名が出てこなくなり、「三傑」の呼称さえ記されていない。じつはこの情況こそ真相を現しているのであり、本稿の前段で周谷が述べていたように、李克農は徐恩曾の「特務総本部」のもとでは中共の指示でひそかに別の任務を負って行動していたのであった。この功績が実って終生、中共情報機関、安全部のトップに立つことができた。蔡孟堅にはそのような李克農の印象が強かったのである。では、李克農は国民党の情報機関の中でどのような任務を担って潜伏していたのであるか。姚永森は胡底が勤務していた映画会社に李克農を招いて錢壯飛を紹介したように述べていた。明らかに二人はさきさきに打ち合わせをしてい

て銭壮飛を引き合わせたに違いない。銭壮飛もすぐに李克農を信用したところを見ると、事前に胡底から会見の目的を聞いていたのである。一方でこういう記述もある。西湖博覧会が終わったあと、胡底は銭壮飛と上海に帰ってきて、またある映画会社で仕事をした。一九二九年十一月の間、胡底は撮影所のスラジオで旧友人の李克農と出会った。胡底の紹介で李克農は銭壮飛を知った。この時、李克農も国民党に指名手配され、安徽から上海に逃げてきたところであった。潘漢年と小さな新聞を創っていたが、それが閉鎖されると中共滬中区委で工作した。⁴⁶

李克農の滬中区委での仕事は宣伝であった。そうすると李克農が撮影所を訪ねたのは銭壮飛を特科に取り込むためであったろう。李克農は特科の責任者、おそらく陳賡から国民党の内部事情に通じている人物を物色するよう指示されていた。すでに述べておいたが、一九二七年十二月、中央特科が有能な党員を国民党本部や関係機関に潜入させることを決定してから、特科の責任者周恩来は情報科長の陳賡を使って各方面に利用できる人物を探していた。李克農がいつしよに小新聞を出していたという潘漢年はこの時、李立三路線の文化工作を担当し、秘密党員楊度に指示を与えていた連絡員であった。⁴⁷李克農は潘漢年から話があったのかも知れない。穆欣がわざわざ潘漢年との関係を持ち出したのはそれを示唆していたともいえる。しかしながら、李克農と胡底の関係がどのような契機によったのかは上記の説明でもはっきりしない。そもその経緯が不明なのか、故意に明らかにしないのか、徐林祥と朱玉の長編の李克農伝にもこの件を別の事柄を記すことよって曖昧にしている。ただ、さきの姚永森が胡底と李克農の出会いを次のように語ったのはもつとも説得力があった。

「一九二八年二月、李克農は艱難をのり越えて蕪湖から上海にたどり着き、ついに追捕の敵から逃れ、安全に阿英、蔣光慈らが開設した『春野

書店』に潜入した。同年の秋、福興字庄が正式に開店した際に、李克農は中共中央宣伝部の責任者羅綺園の命を受け、宣伝部の幹事、人が『小開』と呼んでいた潘漢年と合作し、前後して『鉄甲車』と『老百姓報』という二つの党の主張を宣伝する新聞を作った。たぶん一九二九年の初め、李克農は中共江蘇省委滬中区委に移り、宣伝委員を担当し、いつも党が統制する撮影所や宣伝の関連部門に出入りした。この時、胡底も杭州から上海の映画会社に潜入し、仮名で本業―映画俳優をはじめた。李克農は文芸事業上の見識や造詣および故郷の蕪湖で入った青幫組織の秘密工作の才能で、またたくまに六歳年下の胡底を吸収した。しかし胡底の才華が横溢し、機敏で果敢さに対して、李克農はしきりに褒めそやした。これより二人はたがい知己として、自己の才幹をもとめて、党のために一つの事業をすることを約束した。⁴⁸

姚永森の論述に加えて、李克農に関する気になる論評を以下に載せておこう。時間系列に並べてある。

一九二七年十一月、国民党安徽省政府主席陳調元は五萬元の大洋で李克農を通緝し、その後、李克農は迫られて上海に逃亡した。

一九二七年十二月、中央は一二の忠実な同志を国民党内部に派遣することを決定した。陳賡が指導する中央特二科が成立すると、周恩来は中央の上述の決定精神にもとづいて陳賡にただちに人選を物色するよう指示した。慎重な兆選をへたあと、特二科は李克農、銭壮飛、胡底の三人を国民党最高特務機関に侵入させることを決定した。⁴⁹

一九二八年の夏、徐は陳立夫の命令で上海に無線電訓練班を開設し、学員を募集した。陳賡は消息を知ったあと、すぐ銭壮飛に申し込みに行かせ、結果、一番で合格して採用された。⁵⁰

一九二九年、国民党特務組織は上海無線電管理局の廣播新聞の編集を募集する名義で特務組織を拡大しようとした。李克農は一番の成績で名

前を変えて上海無線電管理局に入った。李克農の精明、干練はまたたく間に特務組織の頭目徐恩曾の注意を引き起こした。やがて、李克農は特務股長に昇進し、全国無線電報務員を掌握した。官は大きくなかったが、権は小さくなかった。ここに至って、中央情報史上に有名な「龍潭三傑」の錢壯飛、李克農、胡底は均しく徐恩曾の有能な干将すゝもといふまきとなった。

一九二九年、同郷の胡底の紹介で李克農は錢壯飛を知り、同年十二月、李克農は周恩來の指示で、李沢田リタクテンの仮名で上海無線電管理局に入り、正式に国民党情報機関に侵入した。徐恩曾は李克農に対して一段の期間観察した後、李克農に対しても信任が生まれた。やがて李克農は特務股長に昇任した。

一九二九年十一月、李克農は中共滬中区委宣伝委員になり、上海で偶然に同郷の胡底と会い、胡の紹介で錢壯飛を知り、錢の推薦で、李克農は一九二九年十二月、無線電管理局に試験を受けて合格し、その後、全国無線電報務員の登録と試験仕事を管理する責任者となり、およそ党組織に列記する名前はすべて採用した。

一九二九年十二月、中共中央は正式に李克農、錢壯飛、胡底によって「特別小組」を組織し、李克農が組長に任じ、中共中央特科が直接指導し、陳賡の単線連絡をとることを決定した。

李克農が映画会社を訪ねたのは党の文化活動に協力できる人物を物色するためであった。それが江蘇省宣伝部の指示によるものであったことは姚永森の記事でよく分かる。潘漢年は顧順章事件後、再編成された特科の中心的存在となる人物で、以後も統一戦線のうえに重要な役割を果たす。この時は、上述したように楊度と単線連絡をとって国民党の裏情報を周恩來に伝えていた。李克農が始めから錢壯飛の勧誘を目的に胡底に会ったのかどうか分らないが、胡底とは一回かぎりではなく何度も接触して錢壯飛に関する情報を聞き出し、前もって意志をたしかめてお

いたに違いない。そうでないと、錢壯飛が初対面の李克農に上司の秘密の政策をやすやすと口にしたというのは党史作家の作文としか思えない。錢壯飛にはそれほど自分や家族を投げ棄てて党に忠誠を尽くそうとしたとは考えられない。

「三傑」の結成の過程については党史を基準に多くの党史作家がそれぞれ尾ひれをつけて論じた。十人が論じれば十人の内容があった。そこから何が真実かを理解することはたいへん困難である。その大きな原因はほとんどの論評が党史の基準を逸脱しないで、如何に党史の権威を高めるかのみ配慮した補足の内容でしかなかったからである。したがって、いくら多くの論説を読んでみても、その文脈に隠された事実を読み取らなければ、ほんとうの真実は得られない。「三傑」が生まれるまでの推移を錢壯飛の立場から追ってみると、党史とはまったく相反する筋道が見える。

では、どのような筋道が描けるのか、すなわち上海に逃れた無名の共産党員の錢壯飛がどのようにして国民党の実力者徐恩曾の秘書になり得たのか、その真相の経緯はじつはこうではなかったのかを重複を厭わず、ここでもう一度追ってみよう。

北京での錢壯飛の事業は、妻の言葉を借りれば何をしてもうまくいかなかった。錢壯飛の家族は一時、平安里にあった洋館の家に住んだが、そこは党の拠点ポイントで表向きは豪華な暮らしぶりであったが、それはすべて党の秘密工作を掩護カムフラージュするためであった。いったん生活の裏を見ると、毎日の食べ物土を咬むような窩頭ウオトウや白菜のすいとんであった。病院からのわずかな収入だけではとても生活できず、とくに子どもたちに悲惨な目にあわせた。「私の小学校に上がる学費さえ出せなかった。私はいつも親指が出た靴を履いて学校に行った。家庭の負担を軽くするために、お姉おねえさんは満十六歳になるとすぐに嫁あいにえさんいだ。二姐ちいねえさんも小さい頃に名前を変えて

歌舞団に入り、踊子になった」と小学校に上がったばかりの錢江は当時を振り返っている。⁵⁴

党史は、党との連絡が途絶え、ともに上海に逃げてきた胡底との再会を望んだと錢壯飛の心境を語るが、錢壯飛にとってはそれどころではなかった。生活のために必死になって仕事を探し、やっと新聞の求人欄から国民党無線電訓練班が考學員を募集しているのを見つけた。無線電訓練班は国民党建設委員会無線電管理局の管轄下にあり、局長の徐恩曾是国民党の実力者であった。徐恩曾是錢壯飛と同郷人で、これが後々まで錢壯飛に大きな力となった。訓練所に入ると、錢壯飛は後へは引けない覚悟で勤勉に勉強した。訓練期間を終えると、上海国際無線電管理局に就職し、徐恩曾が管理局局長に就任すると秘書に取り立てられた。錢壯飛はまたとない職場を得たが、もう手放したくないという気持ちがあったのと同時に、これで満足するということはなかった。上司の性格や趣向を観察し、気に入られるようにいつも顔色をうかがった。徐恩曾の欠点が好色であるのを知ると、どんな女性が好みかを調べた。やがて徐恩曾の心をつかむ絶好のチャンスが到来した。

浙江省政府が主催した西湖博覧会の責任者になった徐恩曾に博覧会の企画から運営を任された。錢壯飛は上海から家族といっしょに杭州に赴任した。家族を伴って博覧会の仕事に臨んだというところで、その意欲を徐恩曾に表すためだった。錢壯飛はたしかに優れたエンターテイナーであり、また有能な起業家でもあった。博覧会は大成功のうちに閉幕し、徐恩曾の絶大の賞賛を受け、いっそうの信頼を獲得した。徐恩曾から得た信頼はたんに博覧会の成功だけではなく、徐の個人的なことでも好感を得たのだった。博覧会の開催中、参観にやってきた徐恩曾に美人服務員、王小姐を紹介して仲を取り持ち、ついに徐恩曾の情婦にした。⁵⁵ 徐恩曾は、錢壯飛は何でもできると思い、すぐに無線電訓練管理機構の

秘書に任用したのであった。

錢壯飛が周恩来の中央特科に取り込まれる経緯については、それぞれの論者に諸説があったが、党史の論述には、つねに党に貢献しようとする錢壯飛の使命感が強調されていた。しかし、錢壯飛は早くに入党するが（一九二五年）、「大義のために死を顧みない」気概など毛頭なかった。早くに父を失った幼時の境遇が彼の処世術を形成した。あらゆるものに秀でた才能を発揮し、よく言えば「多才多芸」の器用な人間だが、目的達成のためには手段を選ばない冷酷なところがあつた。

彼は徐恩曾に取り入るために徹底して女性を利用した。党史作家も認めるように、徐恩曾の妻妾のもめごとを回避するために上海の家の一角を妾の住いに提供して徐に恩を売った。一九二九年、組織部に調査科が成立すると、徐恩曾是科長に就任し、錢を機要秘書に招いた。これ以来、錢壯飛は調査科科長徐恩曾の公私にわたる秘密を握る立場に立った。錢壯飛も上海から南京に赴任するときに、妻の張振華を説得して長女の錢椒夫婦、息子の錢江を連れてきた。娘婿の劉杞夫は当時二十才くらいの青年で、妻の錢椒は十六才のまだ少女であつた。

党史作家の倪良端は、錢壯飛が三人を南京に連れてきたことを党組織の決定であると妻の張振華に告げ、「君は上海に留まって連絡員になり、劉杞夫は上海—南京間を往来する連絡員になり、長女は南京の機関で私の工作を手助けする」といった。錢壯飛はまた、張振華が来なければきつと疑うに違いないから、「母の病が重く、張振華が上海で面倒を見なければならぬので、しばらくは南京に来られない」と釈明したので、徐恩曾是信じて疑わなかったという。錢壯飛は徐恩曾に余計な疑惑をもたれないように細心の配慮を払ったのだった。⁵⁶

一方、上海に残った家族はどのような様子であつたのか、錢壯飛、李克農、胡底らの行動と密接な関係があると思われるのだが、ここではす

こし気になる点を取り上げてみよう。この時、上海には錢壯飛の老母、錢の妻徐双英、もう一人の妻張振華、次女の（錢壯飛と張振華の間に生まれた）錢莉莉と次子の錢一平がいたはずである。おそらく錢壯飛が南京に赴任する頃のこと、最初の妻徐双英は姓を錢に替えて錢双瑛にし、子どもたちは張氏の本籍である「桐城の人」と名のつた。結婚しても姓は変わらず、出身地は本人の重要なアイデンティティとなるのに、簡単に姓や出身地を変えてしまうのはどうした訳であろうか。これは一般的な中国の社会習俗から見ても不可解なことであった。これは後にも取り上げてみたいが、どこに向けてか錢壯飛の配慮は異様とかがいようがなかった。

党史の記述は、党中央の主導で李克農をリーダーに国民党の権力中枢に潜入する三人の英雄が組織され、国民党の機密情報を適時に党中央に伝達して中共の発展に大きく貢献したという筋書きが語られた。その際、錢壯飛は徐恩曾の機密秘書としての位置、党のためにできることを李克農に告げ、党中央に伝えるよう要請し、李はただちにそのことを周恩来に報告したとか、錢壯飛は初対面の李克農に上海無線電管理局の放送編集員を募集しているから受験したらよいと勧告したとか、李克農の応募は周恩来の命令であったとか、また錢壯飛の進言は直接ではなく、李克農の所属する中共滬中区を通して周恩来に伝えたともいい、さらに錢壯飛、李克農、胡底三人が周恩来と会って指示を仰いだという。こうして周恩来の決断のもとに「龍潭三傑」が組織されたと述べられる。党史作家たちの記述には混乱が見られるが、錢壯飛ら三人のこれらの言動はすべて錢壯飛が徐恩曾の機密秘書になる前であったように語られるのは作家たちの意図的な作為である。

真相は次のような推移であったに違いない。すでに国民党の中枢部に秘密黨員を潜入させることを決定し、信頼できる人物を物色していた中

央特科は、すばやく徐恩曾の機密秘書になっている錢壯飛に目をつけた。中央特科に錢壯飛の存在を告げたのは李克農であったろう。このあたりのことについては、すでに込みいった推測をしておいたが、この時（一九二九年十一月）、李克農は中共滬中区宣伝委員の活動家だった。李克農は同郷であった胡底から錢壯飛の人となりを問い質し、会わせてくれるよう依頼した。

ただ、じつのところ、李克農が特科の情報科長陳賡からどのような指示を受けて錢壯飛を取り込もうとしたのかは前述のように明確なわけではない。党史作家も各が筆に任せて叙述した。李克農の正伝をかけた徐林祥・朱玉は、「一九二九年十一月のある日、錢壯飛はある映画会社に旧友の胡底を訪ねた。撮影スタジオで、李克農を知っている胡底は錢壯飛を紹介して李克農と会った。」また「胡底の推薦の下で、錢壯飛は李克農と知り合った」と述べ、「錢壯飛は李克農に会うと、ひどく興奮して、自己の少しばかりの状況を語り、また李克農に、国民党CC特務組織は上海無線電管理局が放送新聞編輯を招聘する名目で特務組織を拡大しようとしていると告げ、李克農に何らかの手立てを講じて無線電管理局に来て仕事をしてはどうかと持ちかけた」と述べる。⑤ どうして錢壯飛は興奮して李克農に近状を語ったのであろうか。錢壯飛は知り合って間もない李克農にあらゆる情報を饒舌に喋ったというのはどうも不自然であり、その間に錢壯飛の心境を変える何かがあったはずであるが、徐林祥・朱玉はこのあたりの経緯を何も語らなかつた。ほんとうは、李克農は錢壯飛が利用できる人物かどうかを観察に行っただけで、うえのような錢壯飛の話はなかつたのである。作者は何も知らずに党史に合わせただけか、知っていても書けなかつたからであろう。

李克農はただちに錢壯飛が利用できる人物だと周恩来と陳賡に報告した。党に対してけて忠誠心はないが、自負心が強く、煽^{おた}てて使えば

ず役に立つと話したにちがいない。何度も持ち出すが、「奴を連れて来て、党のために利用しろ！」と周恩来が叫んだのはこの場での指示の言葉だった。⑥ 錢壯飛が何時、特科に呼ばれて周恩来に会ったのか分らないが、あの威圧的な態度とは裏腹に躊躇する錢壯飛に懇切丁寧にいまの地位が如何に党のために貢献できるかを説得した。

「いまの君の崗位は簡単に手に入れられるものではない。何をどうあっても決して身分を顕かしていけない」

周恩来のこの言葉を錢壯飛は後にも思い出すことがあった。一九三一年四月二十五日、この日、錢壯飛は武漢から顧順章が逮捕され、すでに自供しているという密電を受け取った。彼はただちに周恩来に伝えることに決した。密電をもとのように封じ、解読した電報をポケットに押し込み、灯りを消して部屋を出た。とつぜん、周恩来のあの優しく思いやりのあるささやきが脳裏に浮かんだ。「この崗位はたいへん重要だ。手に入れることは容易ではない。万にやむを得ないときに至らなければ、自分を暴露してはいけない」錢壯飛は立ち止まり、はっと気がついた。「そうだ！この崗位はたしかに得ることは容易ではない。ここを去ると、すぐに正体が暴露しまい、これまでの苦勞が水の泡になる。我われ党はもうこのような位置を探すのは難しく、もうこのような信用できる核心の機密を手に入れるのは難しいだろう」

やや詳しい錢壯飛の評伝を書いた張崇高は、この言葉を自ら上海に飛んで行って直接伝えるべきかどうか悩んだときに浮かんだものだとし、本稿でもそのように引用したことがあった。しかし、じつさいは顧順章の自供を知った錢壯飛はいそぎ南京から姿を消して特科との関係を絶とうとしたのであろう。はじめは直感的にそう思ったが、しかし上海に残した家族はどうなるのか、南京にも娘夫婦と息子がいる。どちらに立てばうまく事が運べるのか、国民党か共産党か、この密電を特科に伝える

べきか、このまま黙認しておくべきか、しばし錢壯飛は躊躇したのであった。⑥

調査科主任徐恩曾の機要秘書に抜擢された錢壯飛は公私ともに職務につくした。徐恩曾の錢壯飛への信頼は愛人を取り持ってくれたというような軽薄な理由によるものではなかった。錢壯飛はほんとうに有能な人物であり、人間的にも信頼できると徐恩曾は思ったのである。

蒋介石は清党（四・一二政変）後、党内の異端者を排除して政権の基盤を固めた。党務工作の責任者になった陳果夫・陳立夫は二十八年、党中央組織部に党務調査科を作った。対中共政策が重要になると、党中央部秘書長であった陳立夫は調査科の強化を部下の徐恩曾に命じた。二十九年の末、前任の葉秀峰を引き継いで調査科主任になると、やる気満々で任務に臨んだが、いざ組織の実体を見ると、わずか十数人の要員と七八丁の銃しかなかった。すぐに陳立夫の府上を訪ねて組織の拡充を訴えた。陳立夫は協力を約束し、経費の面は蒋介石に請うことにし、人員の拡大は近く卒業するはずの軍校第六期の学生から補充したらよいと提言した。徐恩曾はさつそく卒業予定の学生の檔案を詳細に審査し、初めての自分の弟子となる十数人の学生を選抜した。

王思誠、馬紹武、高振雄、李熙元、馬嘯天、蔡孟堅、黃凱、楊登瀛、錢壯飛などが選ばれた。⑥ ところでよく見ると、この中に錢壯飛の名が見える。これによると徐恩曾は中央軍校第六期生の卒業生から錢壯飛を調査科に採用したことになる。呉江雄の上記の指摘はじつは張文の『細説中統局』に依拠している。張文は調査科の設立当初から参加した特務工作の能幹人物で、長年の勤務から知った内部事情を記録に残している。⑥

張文によると、調査科が成立した初め、工作員はわずか十七八であったが、二十八年六月、蒋介石は中央党務学校の卒業生の中から十人を選抜した。張文もこの時の一人で、他の九人に鄭伯豪、張旆、李風瀾、駱

美中、王保身、任洪濟、謝澄宇、郭良牧、陳玉科がいた。彼らは任地に着くと、すぐに何処かの股（科）の工作に配置されるのではなく、組織に関する見習いの期間があり、その後上海で調査工作の実習を行い、さらに上海近辺で農民運動の調査を実施した。その詳細な報告書を提出して、やっと正式に工作部署に配置された。

一九三〇年に調査科の組織は大幅に拡大された。張文によれば、この年、蒋介石は政治警察の訓練を受けた中央軍校第六期卒業生二十人近くを調査科の工作に参加させた。この時に採用されたのは呉江雄が挙げた人たちであった。張文はこの他に張志鵬、許少頓、林桂庭、齊耀榮、游定一、袁更、王正鴻、范圭中を挙げている。かくて調査科の陣容は一九三一年七月には五〇人ほどになり、組織部各科の中でも一番人の多い科になった。

調査科は中央党部内で勤務し、人員の組織は中央の正式編制内にあつて、比較的公開されたものであつたが、この二十人の六期卒業生は完全に秘密であり、中央党部内で勤務しなかつた。彼らは南京中山東路の中央飯店に隣接した中国と西洋折衷の二階建ての建物で勤務し、建物の主人徐恩曾もここに住んでいた。この建物は人目を避けるため大門外（せいもん）に正元実業社^⑥の看板を掲げて外部からカムフラージュにした。ここが国民党の情報総本部であつたのである。

張文の説明では、軍校六期生の工作員は徐恩曾の私的な部下で、徐恩曾の直接指導の下で秘密の特務工作を行い、相互の関係はまったくなかつた。正元実業社には総幹事の張冲と特務組長の顧建中がよく出入りしたが、他の人はほとんど来なかつた。張文は調査科にいたとき、正元実業社を訪れたことが二三度あり、王思誠、李熙元、錢壯飛らを見たことがあつたが、どんな人物かよくは知らないと述べている。

錢壯飛がどのように徐恩曾との緊密な関係を築いたかを考察する前

に、張文のもう一つの指摘を取り上げておこう。調査科が成立する前、全国各地に直轄的な下級機構は設立されていなかった。一九三〇年になって活動範囲を拡大するために、また収集した情報を適時に調査科に送って処理するために、三人の特派員を派遣し、それぞれ上海、武漢と開封に常駐させた。上海の特派員は楊登瀛であり、後に鮑善甫に代わつた。武漢の特派員は蔡孟堅であり、開封の特派員は黄凱であつた。後に各省、特別市、鉄道に特務室を設立したが、これは特派員が拡大されてきたものである。

上で述べた張文の国民党情報機関の組織部調査科の成立についての説明によれば、意外に官僚世界の間関係に見られる血縁、地縁によって形成されていたのが分かる。同族、同郷の繋がりが上下関係のうえでも大きな作用となっている。そうであれば、錢壯飛における徐恩曾と周恩來の信頼関係はどちらが親密で堅固であつたらうか。中共の党史作家たちが説くように、党に対しては誰しもが忠誠を懐くものであるという前提で、党に媚いる錢壯飛の描き方にはどうしても同意できない。

ところで、三十年に調査科の拡大に蒋介石は軍校の卒業生を参加させたが、その中に錢壯飛の名があつた。張文は錢壯飛が調査科に入ったのは軍校からであつたというのである。おそらく張文の文章を利用した呉江雄は、蒋介石ではなく、陳立夫の助言によつて軍校の卒業生から採用したといい、その中に錢壯飛を入れていた。張文は錢壯飛の名の後にわざわざ「中共地下黨員」と注を付している。当初、錢壯飛が軍校卒業生であつたことをどのように理解してよいのかずいぶん戸惑つたが、国民党系の（親共派と思われる）周谷は、中央軍校第六期の卒業名簿を調べてみても錢壯飛の名はなく、錢という姓のものも多くないと述べて、張文の記憶違いであろうと結論づけた。

だが、はたして安易に張文の誤認であつた見なししてよいものだろうか。

張文は正元実業社で錢壯飛を面識しており、徐恩曾が選抜したわずか二十人ほどの名簿から錢壯飛を見間違えようなことはなかったはずである。軍校第六期生の中には錢壯飛はいなかった。しかし錢壯飛はたしかに軍校の卒業生の中から選ばれたとすれば、解答は一つ、どうしても錢壯飛を採用したい徐恩曾が故意に履歴を詐称して、つまり錢壯飛を軍校の卒業生と偽って採用をしたことを正当化したに違いないのである。

すでに見たように、徐恩曾が設立した情報機関はあたかも彼の私的な組織のようであった。それもそのはずで、丁家橋の中央党部機関内にあった本来の調査科は公開の調査活動だけを引き受けたが、徐恩曾が南京中山東路に設立した弁公処は実業会社の看板で実体を隠して秘密工作を策謀する「伏魔殿」であったのである。その本拠地に主人が住み、妻妾も同居した。錢壯飛は主人の絶大の信頼を受けた個人秘書となり、また公的な工作に関わる機密秘書であった。次の話は多分に作られたストーリーと思われるが、当時の錢壯飛と徐恩曾の関係をよく表わして興味深い。

陳立夫は蒋介石の共産党を消滅させる要求に迎合し、機を窺って自己の勢力を拡大するために、特務機関を設立する計画を立てた。陳立夫はこの任務を徐恩曾に托した。この時、徐恩曾は偵察、審訊の特務機関を建設することはまったく素人であったので、また錢壯飛に任せることにした。ある日、徐恩曾は錢壯飛を食事に誘った。錢壯飛にこういった。

「陳立夫の要請に応じ、国民党中央組織部調査科科长になることにした。共産党の対処が主要な任務である。徐恩曾はまた一人二人の頼れる助手を探そうにというので、もう鄭重に錢壯飛を機要秘書にしたいと推薦したといった。陳立夫はその推薦に承諾したので、錢壯飛によく考えて三日後に満足いく回答をくれるようにと告げた。

それから間もなくのことであった。武漢特派員の蔡孟堅は所用があつ

て中山北路の徐恩曾の弁公処を訪ねた。正門にたしかに正元実業社の看板が懸かっていたので内に入ると、徐の東北訛りの太太（聞くと二太太で、幾人かの子どもがいた）があらわれた。その時、ひよる長いのつぼの人が徐太太のために子どもを抱いて二階から下りてきた。徐太太はこの錢壯飛秘書を紹介した。融通のきかない内向的な人を装っていたのかも知れない。このあと徐恩曾が下りてきて話をした。

蔡孟堅はこの時はじめて錢壯飛と面識した。錢壯飛を一目見て、主人に対して忠臣孝子のように恭順に見えたが、映画「金陵の夜」に出てくる錢壯飛はまるで正反對の姿を描き、徐恩曾は柔弱しく形容し、錢壯飛の方は活発に形容し、徐の前ではすこしも忌憚がなく、徐が人に告げられない秘密を握られているように暗示していた。蔡孟堅は映画では錢壯飛が徐を操っているように誇張していたが、まるで幼稚な取り上げ方だという。映像に描く錢壯飛には、彼の功績を強調するためなお多くの粉飾した場面があつた。

徐恩曾はその後すぐに王小姐を徐弁公処に隣接する中央飯店に住ませたが、徐の太太おくさんに探られ、ついに女たちを連れて姦通の現場を押さえに行き、その場で捉つかまえた。徐夫婦と情婦は一丸となったが、徐はその場で蒋介石と中央に渡した最高機密の密電本コードブックを落とした。徐は一時、飛んで来てけんかを仲裁した錢壯飛に渡してしばらく預けていたが、錢はこれを盗んで写真機で写したのだ！蔡孟堅はこのように批評する。「錢壯飛はすでに平時徐に代わって電文を訳す責任を負っていたのに、何ゆえに中央の要人と南京に住み、何の必要で別の密電本が要ったのか、錢壯飛の有能を描写するために偽作したものだ」^⑩

まもなく錢壯飛は徐にこう提案した。「王小姐を上海の錢の家わたし（錢の太太は上海某医院の看護人であつた―原注）に住まわせたらい」こうして国共の家族が共同生活をするこゝとなり、徐恩曾は週末になると上海に出

かけ王小姐とベッドをともした。錢壯飛は徐の信頼を得るために上海の家にいる一番上の娘、娘婿の劉驥と長子の錢江が南京に移り、それで娘婿を錢の代わりに上海租界の共党「中央」と情報資料を渡す連絡員に配置した^①。

蔡孟堅は上記の映画の映像は真実であると批評しているが、残念ながら錢壯飛方面の情報は詳しくなかったようだ。上記の錢太太は錢壯飛の最初の妻の徐双英のことなのか、また二番目の張振華のことなのか、看護人（原文は看護）というなら張振華のことであろうが、すでに世間体は正妻であったことになる。また娘婿というのは劉杞夫のことであろう。劉驥は変名かもしれない。国民党の実質的な情報機関であった正元実業社で徐恩曾と錢壯飛の関係においてどちらが主導的な権限を握っていたかは、本節が追究してきた主要なテーマであった。これまで本稿では、錢壯飛には中共党に対する一片の忠誠心も使命感はなく、幼少時に形成された人生観を忠実に追求してきたと強調してきた。しかし一方で、錢壯飛の身に纏いつく人間関係が自身の意志とは関係なく行動を規制していた。錢壯飛のこのような行動様式は徐恩曾の機要秘書（私設秘書）になつてからの共産党、とりわけ特科との関係をいっそう曖昧にしていた。しかしながら、南京の徐恩曾の「大本營」である正元実業社では、周恩来の指示のもとに「龍潭三傑」の特別の党小組が組織され、李克農が組長となり、上海の中央特科の陳賡と単線連絡をとった。一方、呉江雄によれば、錢壯飛は徐恩曾に、本部要員の補充、各地に基層機構の設立、南京に秘密指揮機関と秘密通信局の設立を委嘱されて、ここに李克農、胡底らの幾人かの内輪の者を配属した。徐恩曾はさらに中共の情報のか、他の党派や政治勢力の情報を収集するよう命じた。錢壯飛はこの機に南京、天津に通訊社を看板にした半ば公開の情報機構を設立した。中央飯店の四階に設けた長城通訊社はその総指揮機関で、錢壯飛が責任者

となり、同時に主に南京地区の情報を収集するために設立した民智通訊社も錢壯飛が社長となった。天津に胡底を派遣して長城通訊社を設立した。胡底が中共中央に送った情報はこの通訊社を掩護として、暗号で南京の錢壯飛のもとに送られた。錢壯飛はさらに秘密交通員を派遣して上海無線電管理局の李克農の処に届け、中央特科に渡した。こうして、当時の国民党全ての特務組織の機構は後に周恩来が賞賛する「白区（国民党支配区）情報前三傑」に統制されることになった^②。

上に引用した文章の作者の呉江雄はおそらく非共産党系の新聞、団結報の記者であろう。この新聞は大陸に残った国民党の政治団体、国民党革命派が発行するもので、中共の歴史とは異なる独自の刊行物を出している。論旨の基底は共産党の党史の観点に立っているが、国民党の立場からの中共「地下黨員」を見ているのです。これは真相に迫る空気が読み取れる。しかし、同じ国民党系の作家、周谷の指摘を思い起こしてみよう。

すなわち周谷はこういつていた。中共の情報三傑というなら、李克農、錢壯飛、胡底ではなく、錢壯飛、楊登瀛、胡底とすべきであろう。李克農は特科と直結する情報組織の一雄であった。楊登瀛は徐恩曾が上海に派遣した特派員である。楊は上海に派遣されると対敵工作の責任者になったが、しだいに自ら変質して中共の上海国民党調査機関に潜伏して首脳になるが、後になぜかまた国民党に重用される。ところが李克農は、上記の呉江雄の記述にも正元実業社の中でどんな工作をしたのかほとんど語られていなかった。李克農は別の命令系統の中で動いていたのだらう。周谷も南京の「龍潭虎穴」の中で李克農がどのような働きをしていたのか、じつさいは分からなかった。だから周谷は李克農に関して以下のような些細な経歴しか述べなかった。周恩来によって「龍潭三傑」が組織されたあたりから記しておこう。

「錢壯飛の紹介で李克農は無線電管理局に合格した。その後、全国無線電報務員の登記と試験を管理する責任者となり、およそ中共が列する名簿は一律録取し、中共に対する貢献は極めて大きかった。……中央特委書記の周恩来は錢壯飛が継続して留任し、徐恩曾に忠節を尽くすことに同意し、李克農が無線電管理局に入って編集になること、胡北風が中央調査科に潜入することに同意した。錢、李、胡の三人は中央組織関係でもともと地方支部に所属していたが、……三人を組織して特別小組とし、李克農が組長となり、改めて中共中央特科に隸属し、中共特二科科長の陳賡の単線指導を受けた。この三人は後に周恩来に中共情報三傑と称えられた。李克農は後に南京陸海空軍総司令部弁公庁に潜入して秘密電報の解読工作の責任者となり、中共特科は陳賡を派遣して李克農と常に連携を保ち、南京に緊急の状況があれば、李はただちに陳賡に伝えて処理した」

上述のように、李克農は「中共情報三傑」で中心的な役割を果たしているように描かれているが、彼が中心的存在である背景が漠然として分からない。彼がそうである必然的な理由が書かれていないのだ。それは他ならず、周恩来から受けた密かな命令が背景を不透明にしていた。李克農が徐恩曾と関わりをもつようになったのは、はじめ錢壯飛に勧められ、その後周恩来の厳格な命令によって無線電管理局に入ってからである。この時、李克農は短期間で猛勉強して合格し、徐恩曾にもたちまち注目される存在になったというが、じつさいは、この時、周恩来から重要な任務を与えられていたのである。周恩来はあれほど徐恩曾に重用されている錢壯飛に心底から信頼できなかつた。そこで李克農に監視させ、うまく働かせるよう操縦させたのである。李克農は名前を「李沢田」と変えて上海、南京を頻繁に往来し、特科の周恩来、陳賡と緊密な連絡をとって南京の工作を指導したという。

李克農は錢壯飛との関係をうまく保つために上海の家族とも親密に付きあつた。じつはうへのフリーズは筆者の推測に過ぎないが、まるきり根拠がないわけではない。錢壯飛と李克農はじつのところどのような関係であつたのか、本節の核心の課題であるにもかかわらず謎の部分が多い。すでに別稿において錢壯飛の正体を詮索したことがあつた。そこでは次のようなことを指摘しておいた。先ず錢と李は同一人物だという同一人物説があること、李克農は「ほとけの李克農」（原文は弥勒仏李克農）とか「老母鶏の李克農」（上海地方の方言で、①老いたメンドリ、②長く卵を生み続けたメンドリの意がある）と呼ばれて親しまれていた、錢壯飛は娘婿を上海に顧順章の逮捕を知らせに走らせたとき、先ず舅舅に会えと告げたことなど、いろんな顔を持つ李克農の実体があつた。しかしどれも詐称とはいえない。蔡孟堅の同一人物説は党史作家の大家、穆欣に一笑に付されたが、徐恩曾に信用された錢壯飛の名前を李克農が工作の便宜に使つたとも考えられる。ほとけの李、メンドリの李のどちらも優しいというイメージがあるので、もとは同語かも知れないが、なぜ李克農がメンドリなのかは分からない。舅舅は『中国語大辞典』（角川書店）によれば、舅父と同じで母の兄弟を指す。娘婿の劉杞夫（蔡孟堅は劉驥とする）から見ると、母の兄弟とは妻の錢椒の母、徐双英の兄弟ということになる。錢壯飛は劉杞夫に「お前の岳母」といった。だが徐双英には兄弟はなかつた。錢椒の母、徐双英が夫の姓に変えて錢双瑛となつたことから何か説明ができるのだろうか。張振華が正妻になつたとしても舅舅は張の兄弟で無ければならない。錢壯飛は単なる親しみで「叔父さん」と呼んだかも知れないが、なぜ舅舅というのか分からない。李克農は上海ではたびたび錢壯飛の留守宅に出入りしたというが、それほど錢壯飛と李克農の關係は緊密で複雑であつたということである。李克農は後に文人の出身ながら軍人の最高位である上将まで上り詰めた。周恩来の後押し

があったのはいまでもない。その周恩来の危機を救ったのは、顧順章の叛変の時、李克農が南京陸海空軍司令部弁公処の暗号解読員になっていたのであった。

注

- ① この周恩来の弔辞は党史が「龍潭三傑」を論じるとき必ず枕詞のように引用される。いま、穆欣『隠蔽戦線総帥 周恩来』中国青年出版社 八〇頁から引用した。
- ② この周恩来の発言もよく引用される。いま、苗休君・竇春芳「李克農両救周恩来」《覚悟》二〇一〇年一期によった。
- ③ 周文琪論文は《党史研究》一九八〇年第二期、譚宗級論文は《上海党史資料双刊》一九八〇年三期に掲載する。
- ④ 葉炳南の錢壯飛は『中共党史人物伝』三十四卷一九八七年に載せる。なおいまCNKIの錢壯飛を検索すると数十編の論文が閲覧できる。
- ⑤、⑥ ④と同じ
- ⑦ 蔡論文一は《伝記文学》第三十七卷第五期、蔡論文二は《伝記文学》第五十二卷第五期に掲載する
- ⑧
- ⑨ 周文琪(③)は、錢壯飛が上海に逃避したあと、党は陳賡を派遣して錢壯飛を同志の家に落ち着かせ、安全、生活面の十分な配慮を加え、家族にも妥当な配慮したという。錢壯飛は上海で国民党、とりわけ徐恩曾の部下の迫害の対象となり、この年の八月、李克農、錢壯飛、胡底(のちに鄂豫皖根拠地で張国濤に殺される)の三人組は江西の中央根拠地に配置され、三十二年春、紅一方面軍保衛局が成立すると、錢壯飛は局長に任命される。しかし、錢壯飛は長征に军委縦隊に編まれ、遵義会議ののち、貴州息烽県の流長あたりを行軍中、空襲を避けるため軍から離れて失踪した。錢壯飛の死亡についてはのちにいくつかの説が現れる。爆死説、当地の土豪による殺害説、事故死説、そして周恩来による肅清説であった。周文琪は錢壯飛の遺児、錢江、錢一平は周恩来に養育され、そのあとモスクワで教育を受けたという。周文琪と同じ時期に公表された譚宗級の論文も「錢壯飛

同志が生命を捨てて、勇敢機智に党中央を保衛した卓越した功績は、周恩来同志はずっと心に銘記し、しっかりと彼の一家の面倒を見た。錢壯飛が犠牲になると、彼の妻と二人の子どもは生活が苦しくて一家離散し、つばさに苦勞をなめた。周恩来同志はあらゆる手を尽くして行方を尋ね、あらゆる手間をかけて、ついに探し出した。周恩来同志は錢壯飛同志の遺児——錢江兄弟に対して到りつくせり世話をし、自ら己といっしょに出で、自らの手で扶養し、その後、彼らを延安に連れて行って教育した。党と周恩来同志の心を込めた撫育のもとで、錢江同志はとくに名譽な共產黨員、我が国映画界の有名な映画監督になり、錢壯飛烈士の後継者ができたのである」と述べている。

周恩来が何故このように錢壯飛の妻(張振華)の世話を焼き、遺児を扶養し、教育したのであるうか。党史の指摘するように、錢壯飛が党中央の危機を救い、敵のくびきから党指導者を解いたのであれば党組織の救世主であった。そうであれば、党の恩人に報いる行為としては奇異なことではなかった。しかしながら、周文琪が書いた党史には、錢壯飛という主人公の影は薄かった。見せ掛けの主人公に他ならなかったのである。周谷の錢壯飛暗殺説は、錢壯飛と徐恩曾の関係があまりにも深く、国民党のスパイになるのを恐れたためであったという。周恩来は前例どおり軍人出身でない諜報部員は根底的に信頼しなかったのである。

- ⑩ 秦言「錢壯飛和他的子女們」《国家安全通訊》一九九九年第二期
- ⑪ 周谷「六十年前潜伏先国民党心臟中的共諜」《伝記文学》五十六卷一期、二期
- ⑫ ③と同じ
- ⑬、⑭、⑮、⑯、⑰ ④葉炳南「錢壯飛」と同じ
- ⑱ いま、一迪「潜伏敵人心臟的一次驚天行動——錢壯飛智截密電保衛党中央」《浙江檔案》二〇〇一年第五期より引用。
- ⑲ この時の楊度の任務は明らかでないが、第二方面軍の夏曦は「改組派を肅清する」と称して根拠地の江湖では一万人以上を殺したという。金子甫『毛沢東思想全体像』東洋出版 二五頁
- ⑳ 肖岱「紅色間諜李克農 中共特工王」《環球人物》二〇〇八年八月
- ㉑、㉒ ④と同じ

- ②③ 倪良端「虎穴英豪錢壯飛」《党史縱覽》二〇〇三年第五期
- ②④ 陳榮德「伝奇式英雄—錢壯飛」《貴州文史天地》一九九七年第一期
- ②⑤ 供図・孫孟英「Li Lili: A legendary star 黎莉莉 充滿伝奇色彩的明星」《Airport Journal》74
- ②⑥ 姚永森「中共初期情報戦線三傑之一—胡底の一生」《上海党史与党建》一九九五年第一期
- ②⑦ 穆欣「隱蔽戦線総帥周恩来」九二頁
- ②⑧、②⑨ ②⑥と同じ
- ③⑩ 穆欣「胡底：隱蔽戦線の英烈」《党史文彙》二〇〇三年第三期
- ③⑩ 楊新躍「蒋介石身辺的、紅色間諜—記錢壯飛、李克農、胡底」《党史縱横》一九四四年第六期
- ③① ②③と同じ
- ③② ②⑩と同じ
- ③③ 山丁「情報奇才 錢壯飛」《文史天地》一九九九年第二期
- ③④ ②③と同じ
- ③⑤ ④と同じ
- ③⑥ 「杭州 2000年西湖博覧会」《人民画報》二〇〇一年二期の記事による
- ③⑦、③⑧、③⑨、④① 蔡孟堅「共党把我搬上銀幕自顕悪跡」『伝記文学』第五十二卷第五期
- ④①、④②、④③、④④ ②⑥と同じ
- ④⑤ ①①と同じ
- ④⑥ ②⑨と同じ
- ④⑦ 拙稿「公開された秘密黨員—楊度の入党をめぐる(中)」《立命館東洋史学》第二十七号二〇〇四年を参照
- ④⑧ ②⑥と同じ
- ④⑨ 任菊香「紅色特工李克農」《兵团建設》二〇〇五年第二期
- ⑤⑩ 陳榮德「伝奇式的英雄—錢壯飛」《貴州文史天地》一九九七年第一期
- ⑤① 苗体君・竇春芳「李克農両救周恩来」《觉悟》二〇一〇年一期
- ⑤② 楊新躍「蒋介石身辺的、紅色間諜—記錢壯飛、李克農、胡底」《党史縱横》一九九四年第六期

- ⑤③ ⑤①と同じ
- ⑤④、⑤⑤ ②⑥と同じ
- ⑤⑥ 蔡論文二
- ⑤⑦ ②③と同じ
- ⑤⑧ 徐林祥・朱玉『李克農伝』安徽人民出版社 二〇〇三年二十三、二十四頁
- ⑤⑨ ⑤⑧と同じ、二十五頁
- ⑥⑩ この撮影所のスラジオでの錢壯飛と李克農の出会いは呉江雄編著『大反策—国民党要員身辺的中共地下党』(上冊 海天出版社一九九五年七十一〜七十二頁)では次のように述べている。「今回は、李克農は中共滬中区委党組織の責任者として胡底を通じて錢壯飛と連絡をとったものであった。錢壯飛はしっかりと李克農の手を握り、感動して声もわずかに震えていた。『ありがとう! この二年、わたくしが江湖の心中にあったときに、家、のものに気をかけていただき、家、の事は、夢の中で、家の親人、を探したことがありました』李克農はしっかりと錢壯飛の手を握り、またひどく感動していった。家、の人もたいへんあなたのことを懐かしがっていました。今日、あなたにお会いできたことはほんとうに嬉しく思います。』錢壯飛はこのとき、ただ自分がちよと長い間流浪している小舟がとぜん航路標識を見たように思い、全身に力がみなぎってきた。続けて、錢壯飛は自分が知っている陳立夫、徐恩曾がちよと特務組織の拡大に着手していること、徐恩曾は国民党中央組織部総務科科长に任命されているがじつさいは調査科科长であること、徐恩曾は自分に機要秘書になるよう求めていることなどの状況を李克農に話し、李克農にただちに党中央に報告してくれるよう依頼した。同時に、錢壯飛は李克農にただちに党電管理局に潜入するよう建議した。李克農はただちに滬中区委を通じて中央に錢壯飛の状況を報告し、また敵の内部に潜入することを要求した。周恩来は報告を聞くと、果断にいった。『よし! 君たちはそれを引っ張って来い!』かくて、中央特委は錢壯飛が国民党党務調査科に潜入して徐恩曾の機要秘書になることに同意し、李克農が滬中区委を離れて上海無線電管理局広播新聞部に潜入して編集に当り、同時に胡底も敵の調査科に潜入することに同意し、またかれらに国民党最高特務機関をわれわれの手で掌握

するよう指示した。彼ら三人が党小組を成立し、李克農が組長になることを決定し、また中央特委情報科長陳賡が彼らと単線連絡を保つことにした。

⑥1 張崇高「最早發現顧順章叛變的人」《人物春秋》一九九七年第二期

⑥2 岳付玉編著『中統巨梟徐恩曾』團結出版社二〇〇〇年 二十一～二十一頁

⑥3、⑥4、⑥5、⑥6、⑥7 張文の調査科、中統についての記録は種々のタイトルで各種の雑誌に掲載されている。いま刊行年月順に挙げれば、①張文「中統二十年」(中統内幕 江蘇古籍出版社、一九八七年所収) ②張国棟「中統

從顧案血腥發家」(中統特工秘録 江蘇文史資料編集部出版 一九九一年)

③張国棟(文) 原作「細說中統局」(伝記文学 五十五卷二、三、四期所収、

のち伝記文学出版社から単行本となる) ④張文「中統内幕」(戚伍編中統実録 團結出版社、一九九五年所収)がある。ここでは伝記文学版によった。

⑥8 ⑪と同じ

⑥9、⑦0、⑦1 蔡論文二

⑦2 ⑥0と同じ、七十二～七十三頁

⑦3 ⑪と同じ

⑦4 拙稿「統ある追悼文——西安事変前後の周恩来、張冲そして潘漢年」《立命館東洋史学》第三十二号 二〇〇九年

(未完)

(衣笠総合研究機構特任教授)